

4 活動の様子

代掻き



子供たちは、最初は、泥の感触に慣れず戸惑っていたが、段々とその感触にも慣れ、最後は楽しんで行っていた。

田植え



農協の方や地域の農家の方に田植えの仕方を教えてもらった。

苗が倒れないように、しっかりと植えることは思ったより難しいと感じていた。

案山子作り



子供たちは、外敵からお米を守る方法を調べた。その中で案山子作りをすることになった。

班で作業を分担して作り上げた。

本校では4体を日野市産業まつりに出品。うち1点がアイディア賞をいただいた。

稲刈り



農協の方に、鎌の扱い方から丁寧に教えていただいた。ほとんどの子供たちが、稲刈りをするのは初めてだった。最初は、「うまくできるかな?」「鎌を使うのは怖いな。」と不安そうだったが、教えられた通りにやるとうまくできた。しかし、腰を曲げての作業は思っていたより大変だった。

もみがらの活用「お手玉」



もみがらを使ってのお手玉はとても軽かった。代わりにお米を入れてみたら、ずしりと重いお手玉になった。「昔は、きっとお米は貴重だったから、もみがらを入れたんだね。」と子供たちは考えていた。

ぬかの活用「ぬか袋」



精米後のぬかを活用してぬか袋を作成しました。ぬか袋で教室をみ

がくと床がきれいになりました。子供たちは「洗剤を使わないので環境にいいね。」と話していた。

藁の活用「納豆作り」



子供たちは、収穫後の稲やもみを使って作りたいものを決めた。作り方を自分たちで調べ、友達と協力しながら作り上げた。

収穫祭



今までお世話になった方々に感謝の気持ちを伝えるため、もちつき会を開催。

感謝の言葉では「苦労して作ったお米がいろいろな物に変わるのを見て、頑張って育ててよかった。」と綴られていた。

5. 成果と課題

(1) 成果

- ・耕地整理記念碑について学ぶことで、豊かな田を作るための昔の人々の努力や苦労を知ることができ、本校の北門前にある耕地整理記念碑に興味をもつことができた。
- ・豊田の人々の米作りに対する思いを考えたことで、自分たちの住んでいる地域や人々への誇りがもてた。
- ・米だけではなく、米の収穫後に残る藁やもみなどの活用も考え、実際に体験したことで、昔の人々の思いに気付くことができた。

(2) 課題

- ・JAや地域の農家の方々と今後もつながりを維持していくためにはどうしたらよいか、対策を考えていく必要がある。
- ・教師自身が、地域行事等に参加していくことで地域に受け継がれる技術等を学んでいくことができる。

(松本 美代子)

- 参考文献 「120年のあゆみ」 開校120周年記念副読本 日野第二小学校 平成6年
「日野市旧桑田村の地名」 日野の昭和史を綴る会 平成24年
「用水を総合的な学習に生かす」 小坂 克信 平成12年
「たまらび81号」 株式会社多摩情報メディア 平成25年

2. 新たに収集・開発した郷土資料・教材

(1) 日野煉瓦と甲武鉄道

1. 教材化の意図

明治21年甲武鉄道会社が設立され、新宿より八王子に達する鉄道を敷設することになりました。明治22年4月、まずは新宿―立川間が開通しましたが、多摩川をわたり日野・八王子間の開通を待つ人々にとっては少しでも早く敷設されることでした。

鉄橋を架けることは大変な工事であり、大量の煉瓦と経費が必要でした。日野宿の土淵英、高木吉造、河野清助の三氏は建設を早めるために、鉄橋の橋脚建設に必要な煉瓦を日野で製造することを考え、煉瓦製造に専門の技術を持つ横田金左衛門氏を横浜より招聘し「日野煉瓦工場」を設立しました（現在の日野警察署）。原料の粘土は近くの“いぬま”から出る粘土を使い、生産された煉瓦にはH（日野）B（煉瓦）W（工場）の三文字を刻印、鉄道会社に提供、4か月後の8月には立川―八王子間の開通となりました。

ところで、開通しても、列車が通過するのみの日野宿にとっては、人も荷物も、立川と八王子に持って行かれてしまうため、開通にともない駅の開設が必要でした。土淵英を中心にして立川―八王子間開通前から駅の設置運動は進められ、明治22年有志の寄付金によって用地が買収され、駅舎が建設され、開通の翌年、明治23年1月、日野駅が開設されました。（豊田駅は10年後の明治33年に開設されました。）

このように当時の人々の願いとその実現への努力は、日野に大きな影響をもたらしました。渡船場、継立て場としてにぎわっていた甲州街道の人や物の往来は減少し、渡船業者、旅籠、茶店等の営業は大きな打撃を受けることになりました。一方、鉄道の敷設は高速、大量の輸送を可能にし、東京の都心部と日野が短時間で繋がり、人々に多くの便益をもたらすことにもなりました。

鉄道の開幕という大きな変化に、当時の人々が苦悩し葛藤する中で町の発展を考え、歩んできたかを学ばせ、地域の成り立ちについて関心をもたせたい。そして、ふるさと日野の一員として、身近な集団や社会をよくし、自分を生かすためにどうすればいいか、その役割と責任を自覚し、ふるさとを大切に思う子どもの育成を目指したい。

参考資料 「日野市史 通史編三 近代（一）」日野市史編纂委員会 平成10年

2. 指導計画

第5・6学年 道徳

(1) 主題 日野煉瓦と甲武鉄道 4－(7) 郷土愛 (1時間)

(2) ねらい

日野に煉瓦工場をつくり、鉄道開通、日野駅開設に尽くした先人の願いや努力の姿をとおり、住んでいる町の発展に関心を深め、自ら向上していこうとする心情を育てる。

(3) 資料

読み物資料「日野煉瓦と甲武鉄道」

(4) 本時の展開

	主な学習活動	指導上の留意点	資料・備考
導 入	○「日野の渡船」と「多摩川を渡る甲武鉄道」の絵を見て、世の中が変化してきたことや、橋脚の煉瓦が日野でつくられたことについて感想を話し合う。	・渡船の仕事と暮らし ・鉄道の利便性 ・鉄道設置への関心 ・橋脚の煉瓦に注目	・日野の渡し（絵図） ・甲武鉄道（写真） ・開通・日野駅開設までの年表（掲示用）
展 開	1、資料「日野煉瓦と甲武鉄道」の資料を読み、日野煉瓦が製造されるまでの歩みについて話し合う。 ①八王子まで開通することができなかったわけ ②日野に鉄道が通るようになるまでの日野宿の人々の思い・願い ③土淵英氏たちが煉瓦工場設立のために考え実施したことについて 2、土淵英氏が行ってきたことについて考えたことを書き、発表する。 ①土淵英の歩みについて（ノート） ②意見交換	・大量の煉瓦が必要 ・川の流水と頑丈な橋脚 ・人々の開通への期待と不安の心情 ・立地条件 原料が採れ、多摩川（消費地）に近い、働く人（瓦職人） ・鉄橋建設 ・日野駅開設 ・目標・努力 ・土淵英氏と「郷土ひの」の発展について考えさせたい。	・読み物資料「日野煉瓦と甲武鉄道」 ・地図で位置関係把握（立川―多摩川―日野） ・土淵英氏の写真（「八坂の杜」より）
ま と め	○煉瓦に刻まれたH・B・Wの三文字が今の私たちの生活に何を伝えているのか、考えをノートにまとめる。	・HBWの文字が表している意味 ・HBWと今の自分たちの生活とのかかわり	・HBWが刻まれた煉瓦の写真

3、読み物資料＜日野煉瓦と甲武鉄道＞

明治21年、新宿から八王子間に甲武鉄道（現在の中央線）を通す計画ができました。そして、翌年（明治22年）の4月、まず新宿と立川間が開通しました。しかし、立川から西、八王子に鉄道を通すには、多摩川や浅川に鉄橋を架けることが必要でした。明治のこの頃は、外国からの新しい文化や技術が取り入れられ、特に、洋風の建築物や、鉄橋の建設には熱に強く頑丈な煉瓦がさかんに使われる時代でした。多摩川の鉄橋を架設するにあたり、大量の煉瓦をどこからどんな方法で

運べばいいのか等、工事に掛かる費用が、鉄道会社にとっては大きな問題となりました。ですから、八王子間までの計画はできたものの、工事を同時に進めることはできなかったのです。

鉄道が通る前の日野宿は、江戸時代の終わりまでは、渡船場、継ぎ立場、旅籠などの旅人でにぎわっていたところでしたから、人々の間には日野の町を通過して、八王子まで鉄道が延びることによって町の賑わいがなくなってしまうのではないだろうか、町が寂れてしまうのではないだろうか、といった不安や心配がありました。

こうした不安や心配をなくし、これまで以上に町を発展させるには、なんといっても鉄道が通過する自分たちの町に駅を作らなければならないことでした。駅を開設するには、中断している立川から八王子までの鉄道の敷設工事を少しでも早くに始めることであると人々は考えました。

こうした中で、多摩川に架ける鉄橋工事を早めるためには「鉄橋工場の近いところに煉瓦工場をつくる」、「日野で作った煉瓦を橋脚に使う」ことを考えていた人たちがいました。

日野宿の土淵英を中心に、高木吉造、河野清助の三人でした。中でも、工場設立の中心となったのが土淵英です。煉瓦工場を建てる場所として、鉄橋を架設する場所に近くて、良質の粘土がとれる所を探しました。今の「菑沼公園」一帯は煉瓦の原料に適した粘土が採取できる所でした。日野宿字下川原（現在の日野警察署あたり）に建設されました。ところで、日野には煉瓦づくりを専門にした職人がいませんでしたので、専門の技術を持った人として横浜から横田金左衛門を招きました。そして、日野の瓦職人を呼んで、煉瓦づくりに励んで働いてもらうことにしました。明治20年のことです。

待ちに待った煉瓦の製造が始まりました。日野煉瓦工場の始まりです。「手ぬき成形」といって、型枠に煉瓦の原料である土（粘土・砂）を入れ込み、型枠の上に盛り上がった余分な土は取り除き、なぜ板という定規のような板で表面を丁寧にならしたあと、干す・焼く・磨く仕上げまでの作業を全て手作業で行います。できた製品にH・B・Wの三文字を刻むこともありました。

「河野清助日記」の明治22年1月27日を読むと、「土淵英、東京より帰宅。鉄道局へ煉瓦を納める約束を決めてきた」と書かれています。その年の7月、待ちに待った多摩川と浅川に架かる鉄橋は完成、8月に立川―八王子間が開通しました。

開通の次の年、明治23年1月6日には待望の日野駅も開設されました。鉄道を使うことで人々の移動は便利になりました。土淵英はこの駅の開設にも大変な努力をしたのです。

大きな役割を果たし、多摩地域で最初の日野煉瓦工場でしたが、創業からわずか2年後の明治23年7月、中心となって働いた土淵英が急死。煉瓦の製造は中止され、工場は廃業となってしまいました。でも、廃業までの2年間に50万個もの日野煉瓦が製造され、多摩川や浅川の鉄橋を造り上げたのです。この煉瓦の品質が大変優れていることは後になってわかりました。

大正12年の関東大震災でも壊れることなく、太平洋戦争の空襲にも耐えてきたJR中央線の日野駅とその周辺も今、たくさんの乗降客や行き来する人による賑わいが見られます。

日野の近代化と発展に大きな礎となった日野煉瓦の歴史を大切に、語り継いでいきたいです。

- 参考文献** 「郷土日野」指導事例 第2集 日野市立教育センター 平成19年
「多摩のあゆみ第102号」―煉瓦に見た“多摩の近代化”― 平成13年
「広報ひの」日野宿発見 平成9年4月1日号
土淵英夫著作集「八坂の杜から―多摩郷土史研究―」 平成10年

4、日 野 煉 瓦 の 歩 み

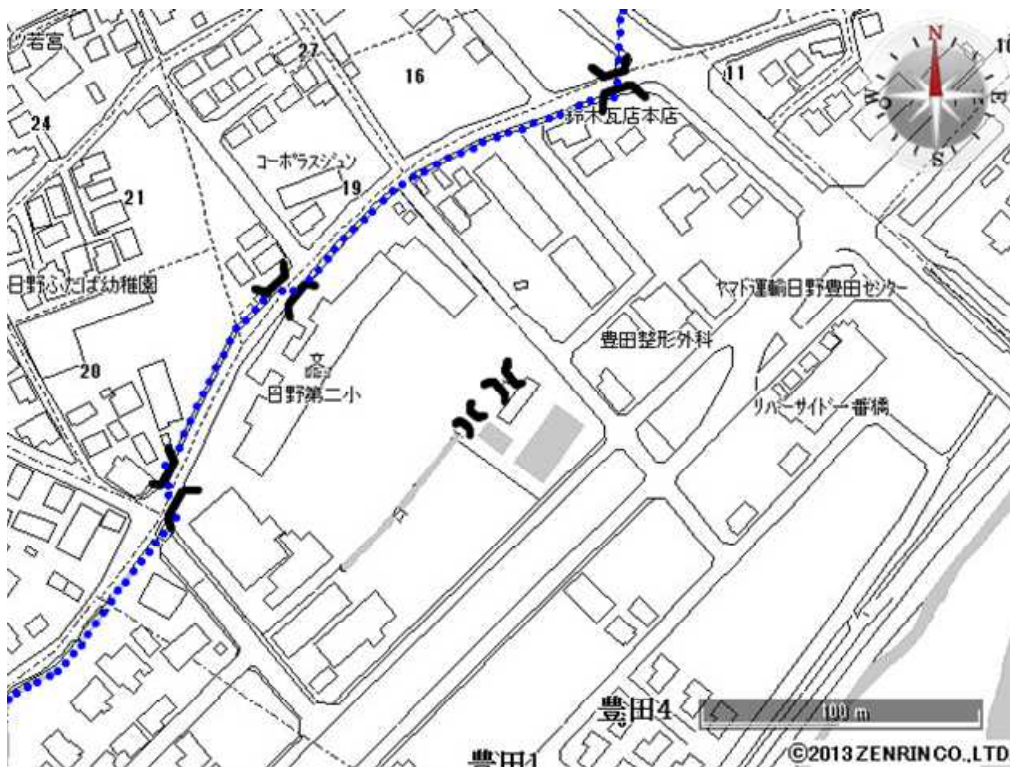
日野市郷土資料館作成「日野煉瓦のあゆみ」より抜粋

年 月 日	項目と内容
明治5（1872）年 9月12日	新橋―横浜間の鉄道開業
明治19（1886）年 11月10日	新宿―八王子間建設の免許が下りる
明治20（1887）年 12月12日	この頃、日野市万願寺（藺沼周辺）で採取した粘土の土質試験を行う。「土質試験候処良好之煉化用に相適シ就中其光沢如キハ最上品之品評ヲ得」 「煉化製造所新設認可願」ヲ提出。
明治21（1888）年 1月25日 1月下旬 7月1日	日野宿下河原に工場を建設し、操業を開始する。計画沿線の測量に着手（全長40km）、6月に完成。 甲武鉄道の工事着手。
明治22（1889）年 1月23日 1月27日 2月12日 4月11日 5月15日 7月頃 7月17日 8月11日 9月 8日 9月23日	「土淵英東京馬喰町火の見下津久井屋ワク井江煉化掛合出京」 日野煉瓦工場、鉄道局ト煉瓦売買ノ契約ヲ締結。 日野煉瓦工場が窯の手直しを行う。 甲武鉄道、新宿―立川間の開業（1日4往復運転） 煉瓦の焼成で燃料に松薪を使用している。 多摩川・浅川鉄橋完成。 日野煉瓦工場における煉瓦生産高約50万個（日野宿出入荷物表） 日野停車場設置の資料で、土淵から甲武鉄道会社社長へ提出 甲武鉄道、立川―八王子間の開業（全線開通）。 「日野停車場設置之義ニ付再願」 飯綱権現煉瓦造覆屋の工事に着手 甲武鉄道へ日野停車場用地の提供と寄付（1、200円）を申し入れる（土淵から甲武鉄道へ）。
明治23（1890）年 1月 6日	日野停車場の開設。
7月29日 8月30日 9月27日	土淵英が逝去（31歳）。 日野煉瓦工場、廃業願を提出（操業期間は2年半）。 立川村が甲武鉄道架橋の修繕を負担しないことを決議。
明治24（1891）年 5～7月	日光橋が日野煉瓦で架け換えられる。
明治26（1893）年 4月 1日	南多摩郡が東京府へ移管。
6月19日 7月11日	日野宿が町制を施行。 高木吉造が逝去（39歳）
明治30年（1897）年 4月	八王子煉瓦製造株式会社が由井村に開業（長沼の煉瓦場） 豊田の山口平太夫を最大の株主とする
明治31（1898）年 4月	中央東線（八王子以西）の建設開始。八王子駅が現在地に移転。
明治34（1901）年 2月28日	豊田駅の開設。

（吉野 美智子）

(2) 豊田用水にかかる橋

日野第二小学校の北西部に沿って現在も豊田用水があり、わずかに残る水田の灌漑に使われている。現在では市民の憩いの場所として、子供たちも遊び場の一つとして活用している。学校の周囲にある用水に架かる橋には、人々が残した生活の跡があり、考える材料として活用することが可能である。



日野二小付近
(平成 25 年)

1 地藏橋



地藏橋(平成25年)



地蔵店があった頃の地蔵橋(平成7年)



寺坂地藏(平成24年)

寺坂の上がり口に文政 13 年(1830 年)・昭和 15 年(1940 年)の地蔵 2 体と正徳 3 年(1713 年)の名字塔 1 基がある。(写真左の○で囲んだところ) この地蔵の近くにあることから、橋の名前が付いた。昭和 15 年の地蔵には「上野浄名院八万四千体の内第七五七一体」と記されている。上野浄名院とは台東区上野にある寛永寺三六坊の一つで 38 世の代に地蔵信仰の寺となった。明治 12 年(1879 年)に一千体の願が満ちたので、さらに八万四千体建立の大誓願に進んでいるという。この地蔵の向かい側にはかつて酒屋があり「地蔵店」とよばれていた。(写真中央)寺坂を上ったところには 静岡県三島市の三嶋大社を勧請した三嶋社跡がある。また、奈良時代の古墳や遺跡(豊田寺坂遺跡)が発掘され、ここからは住居跡や古墳も発掘している。寺坂の上には、実際に寺があったかどうかは不明である。

2 高札橋(平成 26 年廃止)

かつて、この地に高札場(法度や掟などが書かれた駒形の板が掲出された場所)があったと考えられる。昔も人が集まる要所であったのだろう。現在は「耕地整理の碑」がある。碑文の



左：高札橋 右：耕地整理の碑(平成 25 年)

書き下し文は「郷土日野指導事例第 3 集」に記載しているので、ここでは略歴を紹介する。

明治 42 年 凸凹の多い傾斜、屈曲した道路、下流の水量を改善するため事業認可される。

明治 43 年 銀行から資金が得られず、山口清之助が立て替える。代替地捜しに苦勞する。

7-9 月に浅川洪水のため堤防が約 1.1km 崩れ、耕地整理を中断する。

大正 2 年 2 年 9 か月の工事で費用 3 万円かけて完成。6.15ha 増加して 62.4ha を得た。

3 小高田橋(平成 26 年廃止)

少し小高いところに田があったので「小高田(こたかた)」とよばれていたらしい。ここは道場(どうじょう)との境界である。道場という字名は全国各地にあるが、仏道を修行する場所だったか、武術・技芸を教授修行する場所であったと考えられる。近くの東豊田陸橋を建設する前の遺跡調査では、竪井戸と板碑 1 枚、石積みの石垣のようなものを出土している。



小高田橋(平成 25 年)

4 日野第二小学校のプール前にかかる 2 本の「プール橋」



プール前にかかる橋(平成 25 年)



日野二小付近(昭和 44 年頃)

校庭とプールとの間にも 2 本の橋がある。橋の下には水がないためか、夏にプールを往復していても、その存在に気付いていない子供がいる。そこで、現場を訪ねて橋の存在を確かめ、なぜこの場所に橋があるかについて考えさせる。次に、昭和 44 年の航空写真を読み解くと用水があったことが分かる。謎解きをする過程で、航空写真のプールの位置が現在と異なるため、学校のプールの歴史を知りたくなるであろう。旧プールは昭和 31 年に保護者・地域の手によって造られ、昭和 55 年まで使用していた。(秋田 克己)

参考文献 日野の昭和史を綴る会「日野市旧桑田村の地名」 平成 24 年
小坂克信「用水を総合的な学習に生かす」 平成 12 年

(3) 蚕糸試験場日野桑園の歴史と教材化

1. 蚕糸試験場日野桑園の歴史

幕末以来、我が国の生糸類は貿易輸出高のほぼ50%を占める重要な輸出品であった。しかし輸入国より、品質が一定しない等、苦情が絶えなかつた。



明治44年(1911年)、杉並高円寺に、生糸の品質向上を目指した農商務省・原蚕種製造所が開設した。外山亀太郎博士の提唱した日本の小石丸と中国の蚕から生まれた優秀な蚕を、全国に広めることが目的であった。原蚕種製造所へ桑の葉を供給するため、万願寺に桑園が造られ日野桑園が誕生した。機構改革により、原蚕種製造所は昭和3年に農林省蚕業試験場となり、昭和12年には蚕糸試験場となった。昭和3年頃より、日野桑園では桑の研究が始まったとみられるが、昭和7年の第一蚕室開設に伴い、桑・蚕の研究は高円寺ではなく、日野で行うこととなった。松本や新庄等の蚕糸試験場で研究されたものも当地において検証実験を行い、合格したものを農林省として各都道府県に作るよう指導した。

ユニセフ近代産業遺産申請の富岡製糸場は、生糸業の技術者、工女を育て全国に広めるため設立された。

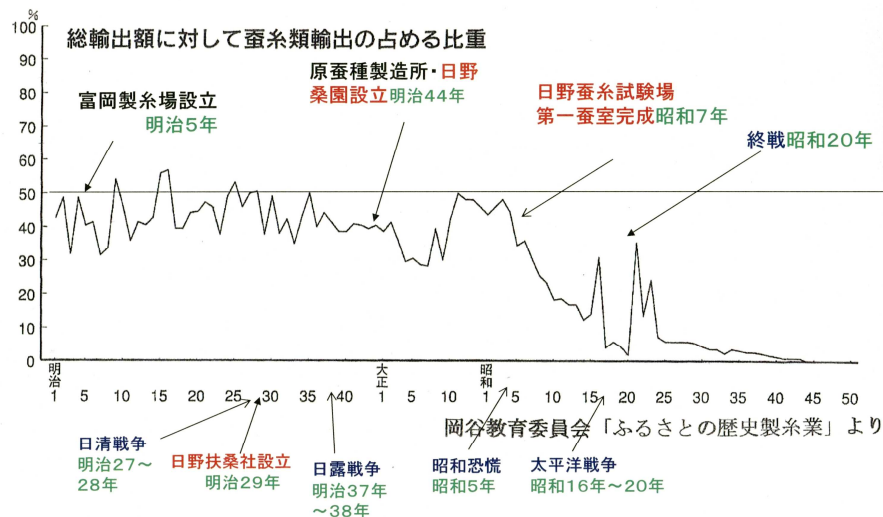
蚕糸試験場日野桑園は、生糸の品質向上のために作られたのである。

昭和55年に筑波に移転し農業生物研究所となるまで、蚕糸試験場日野桑園は国の桑と蚕の研究所として絹糸の品質向上に貢献してきた。

(詳細は郷土資料集第5集を参照)



杉並原蚕種製造所跡地に残る正門



2. 蚕糸試験場日野桑園の教材化

幕末以来の生糸産業が果たしてきた重要な役割は、6年生の社会科の単元に「殖産興業」「絹生産世界一」「軽工業の発展」として、取り上げられている。その発展として、生糸産業を支えた国の研究機関が日野市にあったことやその役割、また日野の人々が関わり支えてきたことを見学や関わってきた方々話をうかがったり、資料を通して学ぶことは、郷土への愛着を深め、郷土への誇りを培うものと考ええる。

折しも、日野市制50周年を迎え、その記念事業として蚕糸試験場跡地が「仲田の森蚕糸公園」として整備された。その一角に桑ゾーンが設けられ、仲田小学校児童や地域の方々の手で、蚕糸試験場で開発された桑の木が植樹された。3年後には、桑葉や実が育ち学習に活用できることになる。また、唯一残された第一蚕室は、近代産業遺産としての価値ある建造物であり、



桑植樹指導の山川元主任研究官

その特徴を調べる学習活動を通し、人々の工夫や努力、また時代の雰囲気
を捉えることができるものとする。



3. 蚕糸試験場日野桑園資料

(1) 蚕糸試験場日野桑園の全景

桑園は最盛期、万願寺・石田・仲田・神明と合わせ 11.2h a、後楽園ドームのおよそ 24 倍であつた。現在、右側にふれあいホール・マンションがある。手前はスポーツ公園になっている。



昭和 55 年筑波移転前 松本 保氏提供

(2) 本庁と桑研究所



農業生物研究所提供

本庁は右側で事務・調査を行い、左側は、桑の研究所であった。

玄関の階段（御影石）と桑の研究所の土台は、現在残っている。

本庁の後ろに、第一蚕室から第六蚕室、寄宿舍・温室等の施設が造られていた。前には、現在のスポーツ公園まで広大な桑園が広がっていた。

(3) 第一桑園と職員

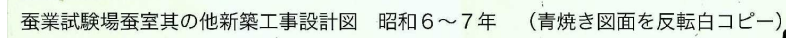


農業生物研究所提供



元職員小峰リン氏提供

(昭和 6 年設計図・郷土資料館提供)



49

4. 蚕糸試験場日野桑園の変遷ジオラマ

①第1期 昭和7（1932）年



仲田に第一蚕室ができ、桑園が拡大した。仲田地区は第一桑園となり、万願寺・石田桑園は、第二桑園となった。

②第2期 昭和中～55年頃（戦前～戦後）



第二蚕室～第六蚕室ができ、移動式水分調整、ドーム、温室、寄宿舍、ボイラー等、施設設の設備が充実した。



③第3期 平成25（2013）年

昭和55年の筑波移転後、跡地に仲田小学校ができ、残された森は平成25年に仲田の森蚕糸公園として整備された。10月の多摩国体では、新築のふれあいホールを中心に、ボクシングやアイスホッケーの競技が実施された。10月7日に天皇陛下・皇后陛下が競技をご覧になりました。



5. 蚕糸試験場の職員と実習生

職員は、臨時職員を含め100名程であった。蚕の上族の頃は、日野市民が多数臨時職員として勤めた。なお後ろの本庁窓は、洋式の上げ下げ窓である。右写真は、1937年に実習に訪れた山梨蚕業学校女子部の生徒である。当時は、国内はもちろん韓国・台湾等からも実習生や研修生が来て学んでいた。



元職員 小尾トヨ子氏提供



元職員 本多善蔵氏提供

7. 現存する第一蚕室の特徴

昨年の秋に、第一蚕室の設計図が発見され、さらに第一蚕室の概要が明らかになった。

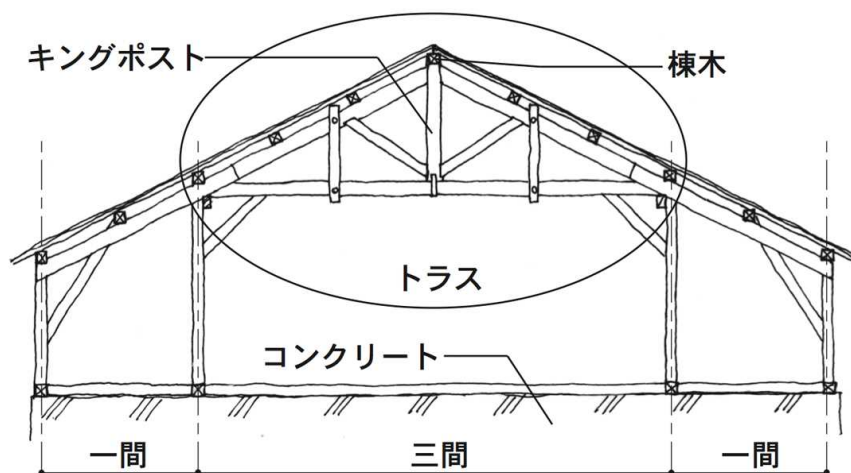
第一蚕室は、関東大震災の後に計画され、1階は鉄筋漆喰モルタル造り、2階は木造である。高床



式・越屋根など伝統的な蚕室の良さを残しながら、当時のモダンな洋風化の影響を受け、前後に屋上ピロティを設けていた。北側ピロティは後に屋根が取り付けられた。また、壁面も化粧壁となっている。内部は二重張りの障子で暖を取る等、国の重要な研究室ということで、普通の蚕室とは違う工夫が施されている。

(写真・農業生物研究所提供)

(1) トラス構造と化粧壁



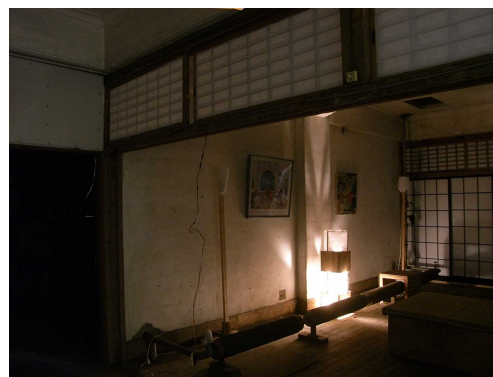
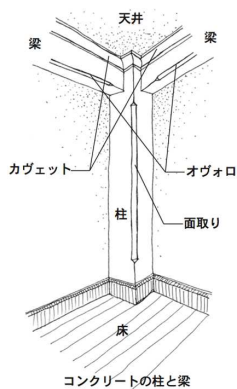
2階は、真ん中に柱を立てないトラス構造で広い空間が取れる。これは、洋式の造りで富岡製糸場と同じである。



第一蚕室2階 広い部屋の左右に明かり取りの窓がある



富岡製糸場東まゆ倉庫



1階の壁面は、化粧壁になっている。部屋の仕切りは漆喰壁で、欄間と南北の障子は外部の温度を遮断するため、二重張りの障子になっている。(写真・図面 タウンファクトリー一級建築士 酒井哲氏提供)

(2) 高床式構造と埋薪法・越屋根

研究用蚕飼育では、埋薪法がとられた。寒さを防ぐために、蚕室の床下に炉を作り炭や薪を燃やし、その上に刳殻を載せた。床下には通風孔がめぐらされ、部屋すみずみまで暖気が行き渡った。蚕は湿気を嫌う。そのため、建物は高床式にして通風孔を設け、屋根には空気抜きの越屋根がある。



高床の空気孔



床下の炉



越屋根

8. 仲田の森蚕糸公園の桑ゾーン

仲田の森蚕糸公園が整備され、桑ゾーンが誕生した。蚕糸の会・日野の主催し、緑と清流課の協力支援で、仲田小学校6年生や近隣住民により、試験場開発の桑が90本程植樹された。3年後には、桑葉と実が育ち、生活科・総合的な学習・社会科・理科・美術等の学習に活用できる。歴史や昆虫の学習の他に蚕飼育・糸取り・まゆの壁飾り・まゆ人形作り・桑の紙すき・枝おろし等、体験的な学習も可能となる。



9. 絹は未来を創る

現在、絹はナノ技術・科学として注目されている。右は農工大学朝倉教授の医療用研究サンプル・人工骨スポンジ等と、ノーベル賞の下村博士との共同研究、オワンクラゲの遺伝子注入蚕から作った光る絹のドレスである。朝倉教授は、難しい6ミリの人工心臓血管



を絹と伝統のより糸の技術を活用し実用化に迫っている。タックス大学のオメネット教授は、絹から記憶フィルムや自然に帰るコップを開発した。人や自然に優しい絹は、未来への可能性を持っている。

＊取材協力 日野市郷土資料館 仲田小学校 山川一弘氏 大井秀夫氏 酒井哲氏 上村耕平氏 松本保氏
小尾トヨ子氏 小峯リン氏 上條茂氏 岩木興吉氏 政田俊夫氏 鈴木藤隆氏 佐伯直俊氏 川瀬健一氏

＊参考文献 「農林水産省における蚕糸試験研究の歴史」 独立行政法人農業生物研究所 平成16年 (柳元 太郎)

3. 関係機関との連携・協力の広がり・深まり

(1) 新選組のふるさと歴史館

「市制 50 周年特別展と“どこにでもあるもの”の資料化・教材化」

1. 節目の年～平成 25 年～

平成 25 年(2013)は、市制施行 50 年、京王の電車・バス開業 100 年、新選組誕生 150 年、三多摩地区が明治 26 年(1893)に神奈川県から東京府に編入されて 120 年、東京都政施行(昭和 18 年)70 年、さらに明治 6 年(1873)の学制発布と共に開校した小学校は創立 140 年…と、日野市や、私たちが暮らす地域とかかわりが深い事物についての節目の年であった。

このため平成 25 年には、市制 50 周年の記念イベントや、“京王れーるランド”の開園をはじめとする京王電鉄の記念事業など、様々な記念行事や記念企画が行われた。このような行事や企画を契機に、郷土日野へ眼差しを向けた方も多かったのではなかろうか。

そこで本稿では、市制 50 年を記念して郷土資料館が開催した特別展『日野市の半世紀』を紹介して日野市の歩みをいま一度確認するとともに、資料化・教材化について考えを巡らせてみたい。

2. 市制 50 周年特別展『日野市の半世紀』

市制 50 周年特別展『日野市の半世紀』は郷土資料館を中心として、生涯学習課文化財係、新選組のふるさと歴史館に所属する学芸員が協力して開催した特別展であった。

市制 50 年の前年にあたる平成 24 年には、明治維新から終戦までの日野市の歩みを辿る特別展を開催した。これに続く平成 25 年度の特別展は、終戦直後から現在、そして未来への日野市の移り変わりを展示するもので、旧日野町の工業都市としての発展と多摩平団地の建設、そして旧七生村の行楽地から住宅地への変貌の二点を、大きな柱として紹介した。

主な会場は新選組のふるさと歴史館であったが、これに先立ち高幡図書館で七生地区に関する展示を行い(会期後半で歴史館の展示と統合)、日野宿交流館では遊びの変遷などについての展示も行った。これら 3 会場合計の来館者は 3,852 人、そのうち小学校の団体見学は 5 校 386 人であった。

特別展の柱の一つは、工業都市としての旧日野町の発展であった。戦後の日野町は、戦前に誘致された「日野五社」を基盤に、東京の衛星都市の建設をめざして工場用地の整備と企業誘致を積極的に行い、旭が丘地区を中心に大工場や研究所の立地をみた。またこれと並行して昭和 30 年代初頭から多摩平団地の建設も行われた。このような工業を中核とした日野町・日野市のまちづくりは、工場の誘致・育成に関する条例が廃止される昭和 41 年(1966)頃まで続いたが、これにより日野市は内陸の工業都市としての性格を強めることになった。



写真 1 「日野市の半世紀」展を見学する小学生

展示ではかつて日野自動車で生産された乗用車「コンテッサ」の模型、小西六（現在のコニカミノルタ）が開発した日本初のカラーフィルム「さくら天然色フィルム」など、日野市の工業の歴史を示す資料を展示した。また大型トラックのエンジン、複合機能をもった自動販売機、CTスキャナー、医薬品といった大企業の製品のほか、アポロ宇宙船計画で使用された部品や、精巧な金属加工がなされた市内中小企業の製品など、現在も日野市で生産・開発されている製品を見て、見学者は日野市の工業の力強さを実感したようであった。自動販売機や乳製品など、日常生活の中で身近なものにも、実は日野市の企業がかかわっているという点にも、観覧者の大きな発見があったように見受けられた。

もう一つの特別展の柱は、七生丘陵の変遷であった。七生丘陵の自然や村内に点在する名所・名刹を活かした七生村の観光への取り組みは、大正14年(1925)の玉南鉄道（現在の京王線府中～八王子間）の開通を契機に戦前から行われていた。戦後の七生村もこれを継承し、京王帝都電鉄（現京王電鉄）との協力関係の中で、観光による地域発展をめざした。殊に七生丘陵のハイキングコースは京王沿線



写真2 日野市の工業の展示風景（中央は日野自動車製ディーゼルエンジン）



写真3 旧七生村地区の展示風景（京王線と多摩動物公園の関係資料）



「日野市の半世紀」展で展示した資料の一例。左から、写真4 富士電機製の自動販売機、写真5 七生丘陵ハイキングコースの案内チラシ、写真6 高幡台団地ほかの入居案内。これらも日野市の50年を語る貴重な資料になった。

を代表する行楽地として賑わい、そうした観光開発の流れの中で、七生村と京王帝都電鉄の熱心な誘致の成果として昭和33年(1958)に多摩動物公園が開園し、続いて昭和36年(1961)に多摩テックが開園した。このような七生村の行楽地としての賑わいは、都市化の波の中で丘陵部の宅地開発が始まる昭和40年代初頭まで続いた。

特別展の見学に訪れた小学生に、かつての七生丘陵には今の高尾山のように人が訪れていた、と語っても、最初はピンとこない様子であった。しかし往時の写真やハイキングコースのガイド・チラシなどの資料を通して、自然豊かなかつての行楽地の姿を、おぼろげながら実感した様子であった。今度ハイキングコースを歩いてみたいと語った児童もいた。

今回の特別展は、工業都市として発展した日野町と、行楽地として発展した七生村から成る日野市の地域特性や、市制施行前後からベッドタウンとしての性格を強めた現在の日野市のあり方を再認識する機会になったのではないだろうか。特別展の内容は図録にまとめ、将来に向けての記録として残す予定だが、市制50年という節目は、郷土日野市の過去と今、そして未来に目を向ける機会となったのではないかと思われる。

3. “どこにでもあるもの”の資料化・教材化

特別展「日野市の半世紀」で展示した資料の中には、牛乳や写真フィルムのパッケージ、施設や駅で配布されていたチラシ・パンフレットなども多くあった。電話機や自動販売機のように日常目にするもの、使用するものも資料として展示された。展示に携わった者の立場からすると、今回の特別展は、このような“どこにでもあるもの”が、日野市の歴史を語る資料になるということを経験する機会でもあった。

私たちの身の回りにはモノがあふれている。それらのモノに伴う情報を把握・分析し、意味を与えることによって、モノは教材となり、資料となる。

例えば、写真7はヒューム管工場の跡地に建てられた大型マンションが平成14年(2002)に分譲される際に、街頭で配られた団扇である。日野市の夜景の中央にマンションが描かれ、その右(北)には多摩川が、マンションの周囲にはモノレールや中央線が描かれている。裏面には「JR中央線沿線最大級プロジェクト。707家族の『夢の町』」とある。

このような団扇は、住宅の分譲のみならず様々なイベントなどで配られている。しかしどこにでもあるようなこの団扇をきっかけに、かつて多摩川で行われていた砂利採集、その砂利を求めて立地したヒューム管工場、下水道の普及と宅地化の進展に伴う工場の転出、モノレールの開通と区画整理事業、といった地域の歴史を辿ることができる。「この大きなマンションができる前には何があったのだろう」、「そこでは何を作っていたのだろう」、「その工場はなぜ日野にできて、なぜ日野からなくなったのだろう」といった問いを重ねることによって、地域の移り変わりや日野市の歴史の探



写真7 マンション分譲を宣伝する団扇(平成14年)

求を始めることができる。明朝の新聞折り込み広告は、10年後、50年後に地域の歴史を語る教材・資料になるかもしれないのである。

その一方で、この“どこにでもあるもの”は、どこにでもあるからこそ見過ごされ、捨てられ、10年・50年経つとなくなってしまうというのも、また事実である。

一例をあげると、市制50周年特別展では、ある施設の案内図を年代順に並べて、施設の発展の様子を展示した。しかしこれら案内図は元職員が個人的に保管していたものを施設に寄贈したからこそ残ったもので、その施設は寄贈を受けるまでと同様の資料を保管していなかったという。今目前にあるものの中から、何が次世代に伝えるべき大事な資料となるのかを見極めて保管しておかなければ、自らの施設の沿革さえわからなくなってしまう。

郷土教育において、身近な“どこにでもあるもの”に意味を見出して教材化し、活用することは、それ自体に大きな意義がある。さらにその教材を次世代へと継承することは、“どこにでもあるもの”に10年後・50年後に日野市を語る資料としての命を与えることになる。

博物館では、モノに意味付けを行い、将来の保存・活用に向けての手立てを講じる作業を資料化と表現することが多い。そしてこの資料化の作業は、図書館や博物館の最も大切な役目として従来から行われてきた。その資料化の作業に、郷土教育の教材としての視点が加わることによって、地域が歩んだ足跡はより広がりをもって次世代に継承される。また、学校と図書館・博物館の連携により、継承された教材・資料の情報が共有化されることにより、それらの活用の幅はさらに広がってゆく。

郷土資料となり得る素材は、私たちの身の回りにたくさんある。それらにどのような意味付けをして、資料化・教材化し、郷土教育に活用しつつ将来に継承していくのか…。博物館や図書館、そして先生方の“見る目”が問われている。

日野市が市制施行50年という節目を迎えたことにより開催された今回の特別展は、日野市の過去・現在・未来を見つめなおす機会であったと同時に、「資料とは何か」「教材とは何か」といった問いを投げかける契機でもあったと、筆者は考えている。

(金野 啓史)

（２）郷土資料館

「昔の道具とくらし（小学３年 社会）～郷土資料館による出前授業」

１．はじめに

「ミュージアムにおける社会教育は、情報を介しての語詞教育より、モノを介しての実体教育であるべきでる。実際のモノを介しての体験学習機会の提供にこそ、ミュージアムの存在意義があるとも言える。」（西野嘉章『モバイルミュージアム 行動する博物館』、平凡社新書、2012年、p.58）私たち日野市郷土資料館が、学校に出張して行なう授業も、また団体見学時の対応も、この西野の主張に沿うものである。

私たちは、「モノを介しての体験学習」を、いかようにも各学校・各学年・各クラスの日常的な「語詞教育」と接続できるよう、柔軟に対応している。その一方、資料館側である程度パッケージ化しているモノを持ち込んでの授業も展開している。そうしたプログラムの一つが３年生の社会科「昔の道具とくらし」の学習に合わせて、昔の道具を学校に持ち込んでの授業である。以下、実践例を報告したい。

２．打ち合わせ・準備

まずは３年生担任教諭や社会科専科の教諭からの電話での依頼により、すべてが始まる。日程調整、授業を行なう教室の決定、これまでの学習内容、力点を置きたいポイント等々。日程確定後、書式不問の依頼状を交換便で郷土資料館まで送付すれば事前の事務処理は終了だ。

教室は理科室や家庭科室が利用できると、島状に配されている机の上に、昔の道具を点在させることができ、当日の事前準備が楽である。普通教室で行なう場合は、班ごとに机をくっつけて、それぞれの班ごとに、何点かずつ道具を置いていきながら、授業を進めるようにしている。

３．授業時間・構成・ポイント

授業時間は４５分を標準とし、クラスごとに行なうことが多い。前半２５分程度は、児童に質問を投げかけながら、道具の名称や使い方、工夫されている点などを解説する。後半は実際に昔の道具に触れる時間とし、各自興味をもった道具のおかれた机の間を自由に行き来し、それぞれの道具の重さ、表面の感触、動かしてみる、じっくり観察する等し、スケッチを描いたり、気づいたことをノートやカードに記入する。最後に質疑応答やまとめを５分ほどして授業を終える。

ところで、この授業はかなり欲張った内容であり、４５分はしっかり確保したい。前の時間が体育であったりして、着替えや移動に手間取っていると、実質授業時間が３５分ほどしかないという事態もまま生じるが、そうすると道具に触れる時間も極端に短くなってしまう。一方で、９０分だと、児童の集中力が持たない。どうするか、この点は今後も模索していきたい。

実際にモノに触れるということが最大のポイントであることは言うまでもないが、もう一つ重視したいのは、双方向性・ライブ感覚。極力、学芸員からの一方的な説明に終始しないよう、児童に質問を投げかけ、その声をくみ取って、展開させるよう努力している。公開授業の場合、保護者にも質問してみたりといった具合だ。クラスによって学習進度・深度、雰囲気は異なるため、同じ学校でも、授業展開が違ってくることはよくある。ジャズのセッションのような融通無碍な

ノリ、スイング感をもっともっと大切にしたいと担当者としては切望し、精進していきたい。

4. 教室に持ち込む道具

授業で使用する道具は、以下の基準で選んでいる。トータルして軽ワゴン車に積み込める大きさで、かつ一人で搬入搬出できる重さであること。同種の資料を複数所蔵していて、保存用資料が別にあること、1点しかない場合は、破損のおそれが少ないものであること。歴史的な変化発展を説明しやすい資料であること。

最近はこの授業での活用を目的に、積極的に近現代生活資料の収集に取り組んでいるので、今後、レパトリーを一層充実していく自信があるが、今年度は以下のようなものを持っていったケースが多い。

- ①洗濯の道具：洗濯板（木製、百円ショップで購入したプラスチック製）、圧力と回転力を利用する手回し洗濯機（カモメホーム洗濯機）
- ②洗濯物のしわを伸ばす道具：火のし、こて、炭火アイロン、初期の電気アイロン、現在のスチーム機能付き電気アイロン
- ③暖房の道具：猫あなか、こたつ、湯たんぽ（陶製、ブリキ製、百円ショップで購入したプラスチック製）
- ④炊事に関わる道具：羽釜、鍋（鋳掛直した痕跡明瞭）、電熱器

5. 授業例

(1) 導入 授業の冒頭で、児童のころをぎゅーっと惹きつけるミラクルクエスションはなんだろうか？今も模索を継続中だが、最近はこんな問いから始めることが多い。（以下、Nは筆者・中山、Cは児童の発言や思い・態度・様子）

N：「みんなは、桃太郎のお話知ってるかな？」児童の反応をうかがいながら、「おじいさんは山へ柴狩りに、おばあさんは・・・」

C：「川へ洗濯に！」

N：「じゃあ、ここで質問。桃太郎のおばあさんはどうやって洗濯していたのだろう？」

C：「洗濯板！」児童には洗濯板が眼に入るので、そういう回答が多い。

N：「みんなそう思うでしょ。おじさんもそう思っていたんだけど、実は違うんだって。なんと桃太郎のおばあさんのころには、洗濯板がまだ発明されていなかったんだよ。おばあさんは手で揉むようにして洗っていたんだね。」

C：「えーっ」

N：「じゃあ、みんなは土方歳三って知ってる？日野出身で新選組で活躍した人なんだけど」と発問しながら、挙手の状況や、児童のうなずきを確認し、知っているようであれば畳み掛ける。「土方歳三が生きていたころ、そう今から150年ほど前だけど、土方歳三のお姉さんやお母さんは洗濯板で洗っていたのだから、どう思う？」児童に挙手を求めたり、様子を観察して、「なんと、土方歳三が生きていたころ、日本にはまだ洗濯板がなかったんだよ。洗濯板はねえ、ヨーロッパで発明されたんだって。」

C：「えーっ！」

N：「明治時代、土方歳三が亡くなった後、ヨーロッパから日本に伝えられたそうだよ。みんなは

洗濯板って日本で発明されたと思ってなかった？おじさんも最近まで、このこと知らなかったんだけど、どうだい？」

というようなやりとりをへて、いよいよ道具の具体的な説明・理解に入っていく。

N：「じゃあ、この洗濯板、板ギザギザが刻まれている理由は知ってるよね？何のため？」少し児童とやりとりし、「では、なぜこのギザギザが下にくぼんだゆるいカーブを描いているか知ってるかい？」

このような雰囲気の中、洗濯関係、アイロン関係、暖房、炊事の道具・・・と、時間のゆるす範囲でやりとりを展開する。

(2) 前半の部での道具の説明例①火のし

N：「これは何でしょう？」

C：「ひしゃく」、「お茶を飲む」、「お湯をいれてアイロンにする」

N：「おいしい！お湯ではなく、炭をいれて使ったものだよ。火のついた炭をいれると、この底の部分が熱くなる。その熱を利用してしわを伸ばしたんだね。この底の部分ツルツルしていて、触ってみるととても気持ちがいいよ。ツルツルしているから、滑らかに布の上を走らせることができるんだね。こんな感じに。この道具の名前は、絶対覚えてほしいなあ。この道具は『ひのし』といいます。ところで、みんなが住んでいるのは・・・？」

C：「日野市！」

N：「そう、どちらもひらがなで書くと『ひのし』。でも漢字が違うんだね。このアイロンは火の力でしわを伸ばすので、『火のし』と書くよ。『のし』は伸ばすという意味なんだ。」

(3) 道具の説明例②こたつ

N：「これは何だろう？木の枠の中に何か入っているね。この部分をあけると、中の入れ物がでてくるよ。これは何でできてるかな？何を入れるのだろう？」

C：「金属」、「粘土」、「炭」・・・

N：「粘土を焼いたもので、中に火のついた炭をいれるよ。そして、このように、木の枠にしまいます。そうすると、この道具は何だろう？」

C：「ストーブかな？」

N：「この上に、布団をかけます。ということは・・・こたつ。炭が燃えているのに、布団をかけても火事にならないかと、みんな心配にならない？君たちは炭が燃えているところ見たことある？」

C：「バーベキューで見たよ。」

N：「その時のことを思い出してみて。炎がぼーぼーでてたかな？・・・炭は真っ赤にじわじわと燃えるけど、ほとんど炎が出ないでしょ。だから木の枠や布団に火が燃え移ることはなかったんだね。」

一通り終えたら、後半に移行する。



火のしについて説明している様子 教室を自由に動くことが出来れば、良く道具が見えるように積極的に移動して、説明ややり取りを行なう。

(4) 後半の展開 教室内に置かれた様々な道具に触れてみる時間。学芸員としてはとにかく、それぞれの道具のおかれた机に移動して、触れてみる、それがまず第一。その上で、その経験をどうまとめるかこれは各学校・各クラスのこの日までの授業の到達点を踏まえて、それぞれの教諭に任せている。書式の決まったカードを用意して書き込む、とくにそうしたものは使わずに文字で気付いたことをどんどん書き込ませる、スケッチをさせて、発見したこと・感じたことを付記させるなど様々だ。筆者はその間、教室を動いて、適宜質問に答えたり、工夫された点の詳細説明などを行なっている。



錆掛直したことがわかる鍋を観察する 「壊れたら捨てる・買い換える」が当たり前の今、ほんの数十年前まで「壊れたらなおす」という暮らしのあったことを学ぶ

筆者のこれまでの経験では、一通り触れてみて、感想や気づきを文字でメモした後、すべての道具についてでなくてよいから、スケッチをさせてみると、かなり認識が深化する。

スケッチをするには、対象を細かく観察する必要がある。そもそものように描くか？そして、描く過程で、様々な気づきや疑問が浮上してくる。「なんでここは内側に湾曲しているんだろう。」「このギザギザはなんだろう。」「よく見たら、少し外側に膨らんでいた」等々。説明できるものは説明し、わからないことについては、「本やインターネットで調べてみたり、おじいちゃんやおばあちゃんに聞いてみよう」とさらなる学習を促す。クラス全体で共有すべき重要な気づきについては、最期の質疑応答・まとめの中でフォローしている。

6. 参考になる書籍

『昔のくらしの道具事典』（小林克監修、岩崎書店、2004年）

大きな写真とイラストを多用して、衣食住に関わる道具の名称や使い方、どのように変化していったか、使われた時代などについてわかりやすく紹介している。

近年、似たような書籍がいくつか刊行されており、本書の記述に違和感を覚える個所がないわけでもないが、すでに古典的価値があると思う。2014年3月14日現在、市立図書館には6冊所蔵されている。複数の小学校で、図書室に配架されているのを確認している。授業で活用している学校もある。私たちの出張授業を補う、「情報を介しての語詞」教材として大いに活用してほしい。筆者自身、本年度途中から、授業の冒頭で「細かいことはこの本に書いてあるから、今日の授業でよくわからなかったこと、もっと知りたいと思ったことは、この本で調べてほしい。」と訴えるようにしている。

極端なことを言ってしまうと、ヴァーチャルな「語詞」的学習はこの一冊で完了してしまう。「モノを介しての実体教育」、これだけは本書でもネットでも決して体験することができない。

（中山 弘樹）



(3) 中央図書館

郷土教育への「広報ひの」の活用—図書館における地域資料の作成—

小中学生が身近に感じている地域についての資料で、1冊の本にまとまっているものはほとんどありません。例えば、多摩川や浅川について調べようとして、図書検索用パソコンに「多摩川」「浅川」と入力すると何件か見つけることができますが、「程久保川」になると小学生が期待するような資料は見つけれられません。また、「一番橋」や「高幡橋」についても1冊の本で有効に利用できる資料はまずありません。

日野市の歴史について網羅しているはずの「日野市史」も刊行から20年から30年が経ち、刊行後の出来事については記載がありません。そのため、図書館では、郷土資料館など関係部署と協力して、身近な地域についての資料集を作成し、郷土教育に活用してもらえるようにしなければならぬと考えています。

そのためにも、日野市立図書館では、「第2次日野市子ども読書活動推進計画」に基づき、子どもたちが自分たちの住む地域をより一層理解するための学習へと導く資料集の作成を目指しているところです。

「広報ひの」は、日野市で生活する人のために身近に必要な情報を提供しています。発行された時点では単なるお知らせであっても、時を経るとその当時の生活を知るための貴重な資料となります。また、わかりやすい文章で書かれているため、小学生にも十分理解できるものです。

夏休みに、小学生から「『一番橋』についての資料はありますか」と尋ねられたことをきっかけに、「広報ひの」を活用して以下のような資料を作成しました。

1. 「広報ひの」活用例 「一番橋」について調べる

「一番橋」は、昭和38年（1963年）に造られました。その後、老朽化のため架け替え工事を行い、平成14年（2002年）に現在の新しい橋に生まれ変わりました。平成になってからの出来事は「日野市史」に記述はありませんが、「広報ひの」から次のようにたどることができます。

《昭和36年（1961年）2月24日 第110号 1面》

「待望のかけはし 豊田～南平をむすぶ」 【写真右】

この記事からは、昭和33年に橋を新設する計画が立てられ、昭和36年2月9日（木）午後2時から建設現場で起工式が行われたことがわかります。



《昭和 38 年(1963 年) 1 月 1 日 第 135 号 2 面》「南豊橋、一小(改築)七中(特別校舎)そろって今春完成！」 【写真上】

この記事からは、当時は“南豊橋”と呼ばれていたことがわかります。小さいものですが、工事中の写真も載っています。



《昭和 38 年 (1963 年) 5 月 25 日 第 139 号 3 面》「“一番橋”= 豊田～南平を結ぶ」 【写真中】

この記事からは、昭和 38 年 4 月 16 日に渡り初め式が行われたこと、一番橋の命名の由来などがわかります。



《昭和 38 年 (1963 年) 12 月 22 日 第 148 号 2 面》

「開発になって“一番橋”完成 3ヶ年 6300 万円要す」 【写真下右】

《昭和 39 年 (1964 年) 2 月 15 日 第 150 号 3 面》「“一番橋”豊田側の市道づくり進む」

この記事からは、橋は完成したものの、豊田側に道路がなく車の通行ができずに不便だったことがわかります。(なお、同じページには日野橋に歩道が完成する記事も掲載されています)



《昭和 39 年 (1964 年) 5 月 20 日 第 154 号 8 面》「日野→由木→町田へ 一番橋ついに開通」 【写真下左】

豊田側の市道が完成し、豊田と南平が一直線に結ばれたことがわかります。



一番橋と付随する道路が完成したことで、一番橋の工事に関する広報の記載はしばらくなくなります。再び登場するのは、橋の架け替え工事が決まり、通行車両の重量規制を実施するお知らせの記事になります。

《平成 10 年（1998 年）4 月 1 日号 第 940 号 6 面》「一番橋で重量制限 4 月 15 日から総重量 14 トン以上の車」 【記事上】

一番橋で重量制限
4月15日から総重量14トン以上の車

一番橋は平成3年の東豊田陸橋の完成に伴い、大型車が頻繁に通行するようになり、老朽化が目立っています。

このため、4月15日(木)から橋の掛け替え工事が完了する平成13年3月末日予定までの間、通行車両に対し重量規制を実施することになりました。

総重量14トン以上の車両は通行できなくなりますのでご注意ください。ご理解・協力をお願いします。

▽問合せ先：管理課管理係

《平成 10 年（1998 年）11 月 1 日号 第 954 号 2 面》「きょうから一番橋架け替え工事」 【記事中】

この記事からは、工事の計画の概要がわかります。

きょうから一番橋架け替え工事

一番橋は昭和38年に完成し地域のシンボルとして親しまれてきましたが、都市計画道路の整備に伴い、拡幅架け替えを行います。

工事中は一時的に通行止めや、一方通行となることもあり、皆さんに不便をおかけしますが、ご協力をお願いします。

★全体の計画

▽工事期間：平成10年11月1日～平成15年3月31日

▽現在の橋：長さ130m、幅9・1m、重さの制限14・未満

▽新設の橋：長さ135m、幅16m、重さの制限25・以下

★第1期工事

▽工事期間：平成10年11月1日～平成11年6月30日

▽工事内容：橋台・基・橋脚・基

▽問合せ先：土木課道路係

《平成 12 年（2000 年）6 月 15 日号 第 993 号 2 面》「一番橋架け替え工事のため車両制限があります」 【記事下】

一番橋架け替え工事のため車幅制限があります

新しく架け替える一番橋は、半幅ずつの工事のため、車道幅員が十分に確保できません。そのため、全幅完成まで通行車両の制限を行います。

車幅2・2mを超える車両は通行できなくなります。ご迷惑をおかけしますが、ご協力をお願いします。

▽車幅制限期間：6月24日(土)～平成14年6月30日

▽問合せ先：土木課

《平成 12 年（2000 年）11 月 1 日号 第 1002 号 4 面》「架け替え工事が進む一番橋」の写真が掲載されています。

《平成 12 年（2000 年）12 月 1 日号 第 1004 号》「古い一番橋さんありがとう」写真とともに当時の市長の詩が掲載されています。 【写真下】

「古い一番橋さんありがとう」

日野と七生の合併を祝って架けた一番橋
南平と豊田をつなぎ
手が掛けた橋づくり
スケール全国一番と
名づけも見事一番橋

幾多の歲月乗り越えて
渡った人は数知れず
人恋。台風のその
残照をさえた頑固物
重い車の往來も
だまってい耐えた古い橋
狭され続けた一番橋

世紀の大きな変わり目に
寄る年波を争えず
隣に架かる新橋に
名刺と役割りき離れて
まもなく消える古い橋
その名は残す係りまで
ああ懐かしき一番橋

大人も子どもも
あなたの姿を
古き名残りの一番橋
本堂に本堂にありがう

日野市長 馬場 敬雄

《平成 14 年（2002 年）6 月 15 日号 第 1041 号 1 面》「7 月 7 日 一番橋全面開通へ」

以上の記事を日付順にファイルし、一冊の資料ができあがりました。次に同じ質問を受けたときには、このファイルを活用して小学生の学習に利用してもらうことができました。

なお、中央図書館と市政図書室では、昭和 35（1960 年）4 月 28 日号（第 100 号）から平成 6 年（1994 年）3 月 15 日号（第 843 号）までの『広報ひの』縮刷版」を所蔵しています。それ以降は、原紙で所蔵しています。ぜひご利用ください。

[illegible]

4. 郷土教育推進のための普及・啓発

(1) 地域を知る指導者の育成

① フィールドワーク

郷土教育を推進するためには、指導者自身が地域の歴史や自然、文化、人材などをよく深く知り理解するとともに、人と交流したりモノに直接触れたりすることにより、地域への誇りや愛着を実感する必要がある。その上で、具体的な地域素材の教材化を図り、それを指導することによって子どもたちの興味・関心は高まる。指導者自身が「このことを伝えたい」「気づかせたい」と願いをもって指導に当たることによって「ふるさと日野」に自信と誇りをもった「ひのっ子」を育成することができる。

そこで、郷土日野の自然、歴史、文化、産業など郷土のよさや特色について、より深く・より広く知り、具体的な実践が図れる指導者の育成を目指して、例年夏季休業日にフィールドワークを実施している。これは、日野市教育委員会と郷土教育推進委員会の共同事業として、本委員会のメンバーが講師となって行っている。今年度は「日野宿」を取り上げて7月26日にフィールドワークを実施した。このフィールドワークを通して地域素材をどのように教材化するか、それをどのように提示し実践するかを考えた。



JR 日野駅

明治 23 (1890) 年 1 月地元の有志の寄付によって、甲武鉄道の駅として開設された。昭和 12 (1937) 年、複線化に伴って約 300m 北の現在地に移転。日野の田園風景と調和した入母屋造りの駅舎が作られた。都内の JR 中央線の本造駅舎は、現在ここだけになる。



坂下地蔵

堂内にある金銅製の地蔵座像で、正徳 3 (1713) 年道中安全、宿内安全を祈願して、江戸小船町（現・中央区）の井田八左衛門が、近郷の 232 人の協力を得て造った。旧甲州街道の日野駅西踏切（現在、通行禁止）の脇にあり、明治 31 (1898) 年焼失して一時宝泉寺の観音堂に安置されていたが、夢に地蔵が現れて「元の場所に戻りたい」というので、昭和 7 (1932) 年再建したという。道に沿って高さ約 140cm の享保 5 (1720) 年の石の地蔵（左端）と元文 2 (1737) 年の阿弥陀仏、六地蔵などもある。（写真：日野市観光協会 URL）



飯綱権現

伝説によると、正長元(1428)年高尾山薬王院に飛んで行ったことから「飛び飯縄」と言い、文政 10(1827)年再び勧請したという。しかし、高尾山からここに飛んできたなど諸説がある。甲武鉄道の多摩川鉄橋のためにつくられた日野の煉瓦が祠の下の方に使われている。但し、その上の補修された煉瓦は、日野煉瓦ではない。階段の下には昭和 39(1964)年に開かれた東京オリンピックの記念碑がある。



宝泉寺

願いがかなう時は軽く持ち上げられるという持ち上げ観音(馬頭観音)を見せて頂いた。また、境内には絵島生島事件に連座して処罰された金丸四郎兵衛の墓がある。これをなでると病気が治ると言われ、墓の頭は丸くなっている。本堂の奥には、佐藤道場で近藤勇や土方歳三とともに天然理心流を学び、後に新選組 6 番隊組長として京都で活躍した井上源三郎の墓がある。



八坂神社

鎌倉時代に多摩川で見つけた牛頭天王を祭ったのが始まりと言われ、元亀元(1570)年現在地に移転した。宮司の土淵眞佐子様のご説明によると、寛政 12(1800)年にできた社殿の彫刻は、中国の古い話などをもとにした立派なもので、日野市指定文化財になっている。また、安政 5(1858)年天然理心流の奉納額がある。境内には、筆供養のために建てられた文化 9(1812)年の筆塚がある。

大昌寺

住職杉浦靖俊様のご説明によると、戦国末にできた寺で、甲州街道の整備に伴って、現在地に移転した。讃誉上人の開基で、東京都有形文化財「説法色葉集」や名主の両佐藤家の墓がある。また、市の指定史跡として、俳諧や狂歌で活躍した玉川居祐翁の墓がある。

この寺の鐘は、時を知らせる時の鐘で、天保 15(1844)年から柴崎村(現・立川市)や高幡村など近隣から鐘付料を集めた。





日野本陣

都内で唯一残る本陣の建物で、市の指定文化財。文久 3（1863）年最後の名主佐藤彦五郎によって建てられ、長屋門を改造して天然理心流の道場とした。彼の妻は新選組副長土方歳三の姉で、彦五郎は近藤勇とも交流があり、書簡が資料として残っている。この間の事情を、子孫の佐藤福子様がわかりやすくお話し下さった。



日野図書館と普門寺

日野図書館は、宿の中心で問屋場（宿の役所）のあった所で、高札も立てられていた。現在の建物は昭和 30 年代に建てられた日野郵便局舎を利用し、2 階には日野宿や新選組の資料が多数置いてある。



普門寺

普門寺は、明治の神仏分離の時に八坂神社と分かれた。明治 10（1877）年 1 月日野尋常高等小学校を建築するため境内を半分にし、本堂を解体して木材を提供した。さらに、梵鐘も売って建築費にした。昭和 22（1947）年第一小学校は移転し、現在、中央公民館、中央福祉センターと日野児童館が建てられている。



とんがらし地蔵

昔は竈や囲炉裏の煙で目を病む人が多く、眼病を治すとして信仰されている。「病ん目地蔵」とも呼ばれ、治るとお礼に赤い唐辛子や穴のあいた自然石を奉納した。明和 3（1766）年 5 月に建立されたもので、雑誌『歴史読本』の地蔵百選に入る。なお、堂の傍らには、青面金剛庚申塔が 3 基ある。



井上源三郎資料館

井上源三郎の実家、兄の松五郎は千人同心として多くの記録を残し、現在は土蔵を資料館としている。館長で子孫の井上雅雄様が天然理心流の剣術について、刀と同じ重さの木刀を実際に使って説明してくださった。なお、源三郎縁の京都の寺の場所が最近判明したという。



庚申塔と馬頭観音

日野の町は、宿が作られた当時の地割をよく残し、旧道には石仏が置かれている。写真は米倉家の角で、昭和 50 年頃に増築した時、土中から出土した石仏になる。元禄 13 (1700) 年、明和 3 (1766) 年、元文 2 (1737) 年の庚申塔 3 基、年不明の馬頭観音 1 基が祀られている。

② 研修会

午後の研修は、日野第一小学校のランチルームで、フィールドワークを行った日野宿地区の理解をさらに深めるとともに、地域教材の授業での活用方法を学ぶ講義・演習を実施した。その内容は、次の通りになる。



- ・フィールドワークのまとめ
- ・写真で見る日野宿 100 年の歩み～日野宿発見隊と図書館の役割～
- ・実践事例発表

地元の昔話に親しもう

ふしぎたんけんふれあいたんけん

日野市の仕事を体験しよう

小島善太郎画伯

- ・日野宿と新選組結成 150 周年

- ・教材化演習 郷土資料の活用と問題解決学習

各項については報告されているものもあるので、担当頁を参照して頂きたい。実践事例発表は、昨年度郷土教育推進研究委員会で作成したものが主になる。



なお、「写真で見る日野宿 100 年の歩み」では石嶋日出男日野図書館長から、本の貸し出しだけではなく、町おこしにつながる活動、図書館と市民を結び付ける活動をめざして日野塾発見隊に取り組んでいる。参加者の意見をもとに失われつつある町の宝を再現しようと、収集した写真を『まちかど写真館 in ひの』『ひのつ子日野宿発見』などにまとめたという。さらに、日野宿の様子がわかる写真、多摩川での水遊び、街並み、交通、学校と子ども、一中、下町の共同水車、オリンピックなど項目ごとに紹介があり、日野宿発見隊の HP には約 800 点の写真を掲載しているので、学習に役立ててほしいという話があった。

小杉所員からは、地域の人や子どもたちのために何かしたいという思いや願いが強い。教員がコーディネートしながら地域の方を活用したり、フィールドワークをして本物と触れ合って教材化したりしていくことが大事。わかったことの裏返しが疑問になるとして、2 枚の地図を比べ、子どもと一緒に先生が考えていく演習を行った。そして、子どもたちが意見を出し合って疑問を解決していくことが、授業の楽しさになると指導があった。

・フィールドワークのまとめ

日野宿の街並みや文化財に着目し、「郷土日野」の指導事例などをもとに、どのように教材化するかという視点でフィールドワークを振り返ってみた。

まず、日野宿は、西の坂下地蔵から東の福地蔵までで、中心は問屋場（現・日野図書館）で甲州街道の向い側に上佐藤、下佐藤と呼ばれる本陣兼名主の家があった。甲州街道に沿って用水が掘られ、間口が狭い家が連なり、その裏に畑、用水路、水田が広がっていた。

日野の用水は、永禄 10(1567)年佐藤隼人が中心に掘ったことに始まり、飲料水・生活用水、田用水、水車に使われた。用水を中心に「水の郷・日野」を総合的な学習に取り上げることができる。まず、魚取りなどをして遊ぶ、用水沿いを歩いて見学し、さらに昔の様子などを知る。その後、子どもたちの興味・関心をもとに用水の歴史や利用、水の汚れや周辺の魚や植物など、課題ごとにグループで調べる。その過程で用水の掃除、まとめとして発表会、一部を市役所でパネル展示してもらうなどの事例を第 1、2 集で紹介している。

次は中学年の社会科の文化財（石仏）で、第 8 集の事例では庚申塔を例にいつ・誰が・どんな願いをもって建てたのか、調べさせる手立てを示している。フィールドワークでは災いを防ぐという西の地蔵、悪くなった目を治す「病ん目地蔵」、さらに荷物や人の運搬・田畑の耕作に馬を使い大事にしたことから建てた馬頭観音（宝泉寺の持ち上げ観音も馬頭観音）を見た。また、なでると病気が治ると信じられた金丸四郎兵衛の墓があった。

第 3 集「戦下の日野」は、6 年生の歴史教材として活用できる。例えば①墓の文字から日野の人が戦争で亡くなったことがわかる。②品川区大井第一国民学校が宝泉寺や大昌寺に疎開した。③矢山公園には西南戦争～第二次世界大戦までの日野の戦没者の慰霊碑がある。

さらに『わたしたちの日野』には八坂神社の秋祭りが取り上げられている。お囃子を見学し、その保存・継承に携わる人から話を聞いたり、祭りに参加した体験談を紹介したりすることで、自分たちも地域社会の一員であるという自覚を育てることにつながる。

また、第 3 集には江戸時代の渡船（問屋場跡の石碑や本陣、一里塚）や明治 22(1889)年の甲武鉄道の開通（JR 多摩川鉄橋、日野煉瓦、時刻表）、大正時代の日野橋の架設（橋の設計で有名な増田淳、交通量の増大）、平成時代の多摩都市モノレール（南北方向への交通路、乗客の安全を守る工夫）など時代ごとの交通手段を取り上げることで、町の移り変わりを考えさせる事例が載っている。

この他に教材化できる素材は多く、例えば教育関係としては日野学校訓導の落合滝水の碑（宝泉寺）、八坂神社の筆塚、一小初代校長で日野町長になった日野義順の墓や、近隣の子弟に書道を教えた日野義貴の碑（欣浄寺）があり、普門寺や中央公民館などは第一小学校と関係が深い。また、街並みの 1 つとして蔵などに着目して、建てられた理由、昔と今の使われ方のちがい、さらに今後の町づくりにどう生かすかという教材の組み方もある。

これらの資料を収集するには、新選組のふるさと歴史館をはじめ、日野宿交流館、日野図書館、井上源三郎資料館、佐藤彦五郎新選組資料館、日野宿本陣などミニ資料館も多数あり、比較的使いやすくなっている。（小坂 克信）

③ 平成 25 年度 若手教員育成研修（1 年次）資料

急増する若手教員へ「郷土日野」の理解と授業への活用を図るため、例年市教委主催の若手教員育成研修（1 年次）において「郷土教育」を実施している。本委員会では今年度のフィールドを「日野宿」としている。これに合わせて「日野宿」を教材化する演習を実施した。次に研修時に活用した資料（ワークシート）を掲載する。

郷土教育演習テキスト ～日野宿の教材化を通して～

I 教材発掘フィールドワークの楽しさ

1. 郷土教材を活用し、ふれあいと感動のある授業を！（研修のねらい）

- ① 日野宿の町並・歴史・文化・自然を観察・調査し、身近な地域の教材を発掘する。
- ② 身近な地域素材の教材化（郷土教材）の視点や方法を学ぶ。
- ③ 各教科・領域で実践するため、指導計画を作成する。
- ④ 日野のよさ、特色を学び、「ふるさと日野」を愛する「ひのっ子」を育成する。

2. 「地域は教材」「地域は教室」「地域は先生」「地域は家族」

出会い ふれ合い 教材発掘 これがフィールドワーク！

(1) 郷土教育の基本

- ① 現地に足を運び、② 自分の目で確かめたり、③ 様々な人に取材して、自分の考えを確かなものにしていくこと。

↓

- ・学校(教室)を飛び出して、本物と出会う楽しさ
- ・自分で発掘した教材で授業をする楽しさ
- ・自分で調べ、自分で考え、自分で授業を構成する楽しさ

(2) 郷土教育の目標（なんと日本国の教育目標！）

教育基本法「伝統と文化を尊重し、わが国と郷土を愛する」

3. 日野宿フィールドワーク 13：30

◎よく見て よく聞き よく考えて → 疑問をもつ → 課題をもつ

◎郷土教材は、具体的で よくわかる 面白い（感動がある）

- ① 日野第一小学校 開校 明治（ ）年（ ）年 5月5日
校名は（ ）県（ ）郡（ ）学校）
学校の歴史を刻む（ ）（ ）の碑
- ② 日野用水と大門橋・大門通り
清流復活で（ ）遡上 多摩の（ ）
旧（ ）街道
- ③ 高幡不動尊道の碑
新（ ）街道
- ④ 日野宿本陣・脇本陣
日野宿最後の名主（ ）義弟は（ ）
（ ）流 佐藤（ ）跡
- ⑤ 日野宿交流館
（ ）（ ）（ ）
- ⑥ 日野図書館

- ◎日野図書館長、日野宿発見隊事務局長「石嶋日出男」様
 () と () の跡地
- ⑦ 日野の教育発祥の地
 普門寺
 明治 () 年 () 年 () 学校
 昭和 () 年 () 年 () 学校
 () イチョウ () 地蔵
- ⑧ 日野第一中学校
 () 門 () 用水 () レンガ
- ⑨ トンガラシ地蔵 () 地蔵
 () の () 百選
 その他の石仏 () 塔 () 観音
- ⑩ 欣浄寺
 初代日野学校校長 () の墓
 () 議員 () 町長 ()
 運動 () 社長
- ⑪ 新選組六番隊長 井上源三郎生家
 ◎天然理心流免許皆伝、井上源三郎子孫「井上 雅雄」様
 () → (武田) → () () 千人同心
 () 戦争 () の戦い
- ⑫ 米倉家石仏
 () 塔 () 観音
- ⑬ 日野宿と甲州街道(道中)
 日野宿の重要性 町のつくり方、次の宿 () 宿と () 宿
- ⑭ 八坂神社
 日野一の祭りと神輿、筆塚等八坂伝説
 安政5年 () 奉納額
- ⑮ 大昌寺()のご紋
 () の鐘
 () の墓
- ⑯ 日野第一小学校
 昭和23年 () 戦時中新校舎が () 工場
- ⑰ 本日、行けなかったところ
 ・日野銀行 ・渡辺家の蔵 ・日野駅
 ・宝泉寺 ・坂下地蔵(西の地蔵)と飯綱権現、東京オリンピック碑
 ・東の地蔵 ・日野の渡し

Ⅱ 授業づくり(演習)の楽しさ

1. 地形図を読む 15:00

- (1) 今尾イラストマップを読む。
- (2) 高木家並み図を読む
- (3) () 年と () 年の地形図を読む(新旧比較)

2. 地図とフィールドワークから

- ・わかったこと
- ・思ったこと

- ・疑問、もっと調べたいこと

○年表を読む（ねらいに沿って年表作成）（地形図の読みを深める、追究）

3. 学習課題を設定する（導入）（問題把握・問題提示）

- ・個別・個人（個）

- ・ペア(P) ※トリプル

- ・グループ(G)

- ・全体(一斉)

- ・疑問を整理 → 学習課題の設定 → 指導計画（ ）時間

◎社会科なら、総合的な学習の時間なら、生活科なら、道徳なら

4. 学習課題を追究する（展開）（自力解決→集団解決）

- ・追究の仕方(調べ方)
- ・学習活動の工夫
- ・学習形態の工夫（子どもの実態把握と教師のゆとり）
- ・話し合い活動の工夫、(正しい言葉遣い)
- ・地域教材の活用
- ・図書館司書、博物館学芸員、地域の人材の活用

◎ふだんは仲良し、話し合いは「けんか？」情熱をもって。しかし、「思いやりの心」をもって！

5. まとめる（まとめ）（価値の共有）

- ・まとめ方の工夫
- ・導入とまとめの整合性
- ・ねらいを達成したか

6. あなたの授業は問題解決学習になっていますか？

◎先生にたよらず、自分たちで学ぶ→これが問題解決学習

◎子供が「考える」授業、「よく分かる」授業、「学びあう」授業 →これがよりよい授業の創造（1時間のながれ）

授業開始

- ① 問題は何かな？（問題提示）
どんな問題があるかな？（問いをもつ・問題把握）
- ② まずは、自分で考えてみよう！（自力解決）
予想する、調べる、自分の考えをもつ
- ③ みんなで考えてみよう！（集団解決）
学び合い、調べ合い
- ④ 先生と確認しよう！（まとめ）（価値の共有）
みんなで今日の学習をまとめよう！ ノート・板書を活用して
- ⑤ 振り返ろう！（振り返り）
今日わかったことを中心に振り返ろう！

授業終了

参考文献

東村山市立大岱小学校「まなブック」 平成 21 年

7. 指導計画の作成

(1) 教科・領域

(2) 単元名

(3) ねらい

(4) 指導計画（時間）

※学習指導要領改訂の要点 言語活動の充実→思考力・判断力・表現力、
[深く、確かな理解力] 体験活動の充実→身近な地域の観察・調査

- 課題1 観察・調査・見学等の体験活動をどこに組み入れるか。
- 課題2 ICT活用、衛星写真と地図の活用を図る。
- 課題3 地域の博物館（学芸員）、図書館（司書）、人材の活用を図る。

	ねらい	主な学習活動・内容	郷土教材・資料
つかむ (問題把握)			
調べる (追究) (自力↓集団)			
まとめる			

Ⅲ 若い先生が学校を変える楽しさ

1. 日野で教師をする幸せ

子供っていいなあ！ 学校っていいなあ！ 先生っていいなあ！
日野で先生ができるっていいなあ！ ふれあいと感動の教育を！
(あなたの仕事『教師』は 天職！ 転職？)

2. 日野は面白い（日野のよさ、特色）

(1) 日野のキャッチフレーズ

「緑と清流の町 日野」	「新選組のふるさと 日野」
「芸術文化の薫る町 日野」	「義経ゆかりの平山季重のふるさと 日野」
「伝説のふるさと 日野」	「新鮮野菜と果樹の里 日野」
「おもて梨の町 日野」	「給食日本一の町 日野」
「食育の町 日野」	「教育の町 日野」
「ICT 教育日本一の町 日野」	「図書館日本一の町 日野」
「世界をかける 日野」	「ノーベル賞の町 日野」
「ごみ減量エコの町 日野」	「お・も・て・な・し の町 日野」

※昔は「多摩の米蔵」 ※消え去りそうなキャッチフレーズは「 」

(2) 子どもを引きつける教材

- ・驚き ・疑問 ・意外 ・矛盾 (学習意欲、追究意欲)
- ① 日野橋ができる前にバスが開通したってホント (高幡～立川) ?
- ② 長良川の鵜飼が日野にもあったの?
- ③ 新選組副長「土方歳三」のミゾソバ (石田散葉) は本当に効くの?
- ④ 東光寺・日野宿の昔話・伝説は、今の生活と関係があるの?
- ⑤ 日野宿に参勤交代・お茶壺道中の行列が通ったの?
- ⑥ 日野一小初代校長「日野義順」は、どんなにすごいのか?
- ⑦ 日野にディズニーランドがあった?
- ⑧ 日野に「液状化現象」の地層があるの?
- ⑨ 現在の日野は新選組 (関係者) がつくった?
- ⑩ 潤徳小の子どもは「ひのっ子」ではない?

もう、ありすぎて、ありすぎて、困ってしまう! 「教材の宝庫 日野」

3. 若い先生が学校を変える

- ① まずは、燃えるような学級づくりから
- ② いつも頭の中は、子供、子供
 - ・子供の成長、変容を楽しみに
- ③ よい授業は、よい生活指導、よい学校経営
- ④ 授業の素材は周りにゴロゴロ、即教材化
- ⑤ 子どもと共に地域を知る、そして、地域大好き
- ⑥ 子ども、学校、地域に自信と誇りを
- ⑦ 地域を生かした教育、地域と連携した教育を
 - ・地域は教材 ・地域は教室 ・地域は先生 ・地域は家族
- ⑧ ふるさと日野を愛する「ひのっ子」日野を背負って立つ「日野人」
- ⑨ 授業の見方、分析の仕方を身に付け、そして、明日の実践へ
- ⑩ 組織の一員はルールを守る

◎「そんな教室つくろうやあ」 まきた しんじ

教師ががんばれば 子供もがんばる

子供ががんばれば 教師もがんばる

(小杉 博司)

(3) 校長講話の役割～郷土を題材とした講話～

① 校長講話と郷土

多くの子供たちは地域で生まれ、育ち、生活していきます。そこで見聞きし体感したものは、大人になった時に、自然や歴史・文化を見る上での基盤になるのだと思います。地域にあるものは日常的に見ているために、親しみや愛着は感じているもののその意味について深く考えることは少ないように思います。しかし、地域には地域ならではの貴重な自然や生活するためにこの自然と向き合った人々の営みがあります。そして、こうした営みは文献や建築物、遺跡・遺物等から理解することができます。

また、我が国は季節の変化に富み、地域にも四季折々の歴史的な行事も残っています。校長講話では、季節の移ろいが感じられる地域行事や、自然現象、地域の為に力を尽くした先人の働き等、学校での児童の取り組みを踏まえながら講話の題材を考えるようにすることが大切でしょう。それぞれの地域には、その自然条件を活かした暮らしがあり、それぞれの時代ごとに先人が努力してきた足跡が残っています。

今回、私が取り上げました講話は、140年前に開校した本校を取り巻く町の移り変わりを多摩川という視点でまとめたものです。日野が多摩の米蔵と言われるようになったのは、日野用水があったからであり、容易に渡ることのできない多摩川は江戸の守りの上で重要でありました。自由な人の動きを妨げてきた多摩川も甲武鉄道の開通で大量の人やものが迅速に運べるようになりました。この変化は、我が国の近代化を象徴しており本校の歴史もこうした時代背景の中にあることがわかります。開校当時には、甲州街道に沿って家が並んでいる他は、見渡す限りの田圃で恐らく江戸時代と大きく変わらないものであったに違いありません。この日野宿に初めて近代的なものが入ってきたのが、学校であり、鉄道ではなかったでしょうか。そこには、鉄道開通に先駆けて煉瓦づくりをした先人の存在を忘れてはなりません。

地域に限らずそこに生活する人がいれば、その土地の自然を活かし生活する人々の営みが見えてきます。長年に渡り、生活をよりよくしようとする人々がおり、その地域ならではの生活や行事があります。こうして、何代にもわたりその土地で生活する営みは、その地域の人々に引き継がれていきます。この先人の思いや願いを子供たちに理解させることが、郷土教育の大きな目標であると考えています。そして、このことが郷土愛につながり、将来にわたって日野の発展に尽くそうとする日野人の育成につながっていくのだと思います。現在のJR中央線の上り鉄橋は、開通当時のものが一部補強されて使われています。明治から関東大震災、太平洋戦争を乗り越えて現在も尚使われているものがあるということは、何と大きな歴史の重みでしょうか。

目の前にあってもその背景を知らなければ、事実そのものが風化していきます。注意深く地域を見つめれば必ず素晴らしい素材を発見することでしょう。日頃愛着を感じている素材であるからこそ学ぶ意義も深いのでしょうか。地域素材を上手く校長講話に取り入れることは子供たちの地域への関心を大きく高めることになります。

(日野第一小学校 中島 和夫)

② 校長講話「日野の渡し」

校庭の桜も美しく紅葉し、爽やかに晴れて140周年の式典の日を迎えました。午前10時30分から行われる式典では、4、5、6年生が代表としてしっかりと「日野囃子」と「この星に生まれて」の合唱をしてくれていると思っています。これまで先輩から引き継いできた心を大切にしている皆さんはきっと頑張れると思っています。4年生以上は、木曜日に「記念式典」のリハーサルを行いました。この星に生まれて」の合唱はとても素晴らしいものでした。特に、何度か歌い込む間に力強い歌声となり、校長先生も皆さんから元気をもらいました。また、6年生の「日野囃子」についても、腰を落としてしっかり踊ろうと朝練までしていると聞きとても嬉しく思いました。こうした皆さんの姿勢は必ず、沢山のお客様に理解してもらえと思っています。そして、本校児童全員が周年行事の取り組みを通し大きく成長して欲しいと思います。

今朝の朝会では、日野と多摩川のことについてお話しようと思います。校歌にも歌われているように、多摩川は日野に住む人にとってはなくてはならないものでした。歌詞中でも多摩川は「南に仰ぐ富士の高嶺」と対比させ、「北にめぐれる多摩の流れ」と歌われています。魚釣りや川遊びの場として昔の子供たちにとってはとても大切な場所であったに違いありません。日野で米作りが盛んであったのも、多摩川の豊かな流れを日野用水で日野まで引いてきたからです。でも、多摩川が流れていることで、不便なこともありました。

昔は、多摩川の流れが人の行き来を妨げ、今のように自由によその町や村に行くことを妨げていました。特に、江戸時代は、江戸の町（東京）を守るために、大切な役割していました。日野に住む千人同心は江戸に侵入する敵を防ぎ、幕府の安全を守ることが大きな役割でした。このため、こうした中で立川側との行き来をするために1684年に「日野の渡し」が甲州街道の正式な渡しとして決められました。そして、水量の多い3月から10月は渡船、10月から3月は板橋や、丸太でつくった土橋（丸太の上に土を敷いた）を使っていたといいますが、19世紀半ばには年間を通して渡船になったといわれています。今の場所で言うところの多摩都市モノレールに沿って日野の渡しはあったといえます。船がないと多摩川は渡ることができなかったのです。ですから、旅人は日野で必ず休まなければならなかったのです。多摩川に橋をかけることになったのは、1889年の鉄道の開通です。新宿から八王子まで甲武鉄道が引かれたことで、とても便利な生活ができるようになりました。それができるようになったのは、日野煉瓦という丈夫な煉瓦を作れるようになったからです。124年間壊れない橋げたを煉瓦でつくることができるようになったからです。その後、1926年になって日野橋が完成し、日野の町は大きく変わっていきました。

日野人は、新しい時代の文化を取り入れるために、一生懸命頑張ったのです。皆さんも式典の前に、この頑張る力、皆さんの心を大切にしてください。

（日野第一小学校 中島 和夫）

※ 参考文献 日野宿叢書 第二冊 図録 日野宿本陣―佐藤彦五郎と新選組 平成16年

③ 校長講話「学校給食」

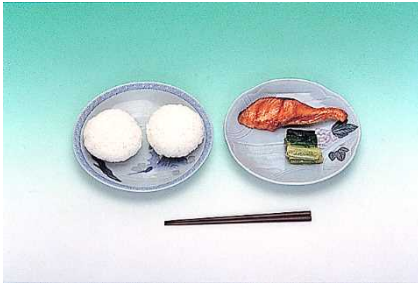


i 今朝は、給食のお話をします。

この写真は、1年生が小学校に入ってから初めての給食を食べているところです。

みんなうれしそうに食べていますね。

学校で行われている給食には、どのような歴史があるのでしょうか。



ii 学校給食が、日本で一番最初に行われたのは、山形県の鶴岡町（今は鶴岡市）というところです。明治22年のことでした。今から124年前です。

生活に困っている子供たちにお昼を食べさせてあげようということで、無料で始められました。

献立は、おにぎり、塩じゃけと、菜っ葉の漬物です。当時の家庭のふだんの食事と同じような内容でした。



iii 二小で給食が始まったのは、昭和22年です。（昭和21年という説もあります。）今から67年前です。

みそ汁を学務員室で作り、週2回出されたそうです。保護者も作るのを手伝うときがあったようです。「みそ汁給食」と言いました。

給食でコッペパンが出るようになまでは、弁当を持ってきました。写真のような弁当箱にご飯をつめ、真ん中に梅干を入れた「日の丸弁当」だったり、お正月の頃には、お餅を入れてきたりしたそうです。家にお昼を食べに帰った子もいました。



iv 写真は、昭和22年、全国の都市で学校給食が始まった頃のものです。

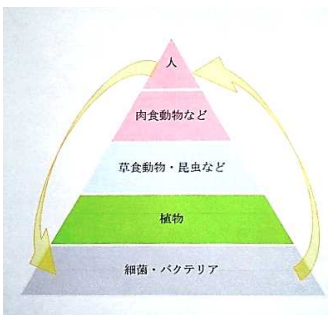
左側がトマトシチュー、右側の白いのが脱脂粉乳（脱脂粉乳）といってユニセフから贈られたミルクです。

昭和34年（既にこの学校は「豊田小学校」から「日野第二小学校」と呼ばれるようになっていました）に、粗末な造りながら給食室ができました。

昭和37年に、栄養士の先生が置かれました。

P T Aによる第1回の給食試食会は、昭和46年です。

v 学校給食は、大勢の人の努力で、いま皆さんが食べているようなメニューになってきました。そして、農家の人、J Aの人、食材や調味料を取り扱う人、栄養士さんや調理員さん、電気やガスや水道の仕事に携わる人など、大勢の人たちの努力のおかげで、今日の給食をいただくことができます。



最後に、これを見てもらいたいと思います。土の中の目に見えないほど小さな生き物が、落ち葉や動物の死骸などを分解します。それを植物が根から吸って育ちます。その植物を昆虫や草食動物が食べます。その昆虫や動物を鳥や肉食動物が食べます。

そして人間は、いろいろな植物や動物の命を食べさせてもらって生きているのです。だから、食べ物を残したり粗末にしたりすることはいけません。また、環境が破壊されれば、生き物のつながりが壊れ、人間も生きていけなくなります。

今週の金曜日（1月24日）から給食週間が始まります。先生や友達と楽しく食べましょう。きっと苦手な食べ物も食べられるようになります。

（日野第二小学校 中村 康成）

（参考文献） 日野二小「開校百年のあゆみ」 日野第二小学校P T A「五十年のあゆみ」
豊田小学校P T A、日野第二小学校P T A広報誌「豊苑」昭和28年度版、32年度版、33年度版、41年度版
全国学校給食連合会ホームページ

（写真 ii, iv 提供） 独立行政法人日本スポーツ振興センター

④ 開 校 140 周 年 に 寄 せ て

さて、本校の前身は、明治6年安養寺の一間を借りた下田小学校の開校から出発し、幾多の教育改革の変遷を経て、明治41年には日野小学校の下田分教場となり、現在の地に日野市立日野第四小学校が設立されたのが昭和30年4月です。以来140年、社会の伸展とともに、幾多の輝かしい足跡を残しながら今日の第四小学校としての基盤を築き上げてきました。この間、歴代の学校長をはじめ、教職員並びに、5720名に及ぶ卒業生諸氏の努力、保護者の協力、地域の皆様の教育への情熱等々、数多くの人々の協力と努力によって第四小学校としてのよき伝統が築き上げられました。

平成25年10月26日、盛大に140周年記念式典が開催できたのも、将にそうした伝統の賜物と改めて感謝の念に堪えません。

さて、本校の校歌の歌詞は、童謡「たきび」で知られる巽聖歌先生から作詞いただいております。このことはだれもが知るところです。この歌詞を口ずさんでみますと、ただ風景を映したのではなく、自然を動きある情景として表現していること、先進的な教育を取り入れていくことを予知したかのような表現等々いろいろと優れた点に気がきます。私がその優れていることのひとつとして捉えているのは、「学べば、我に 理想あり」というところです。子ども達はよく「何のために学ぶのかと問います。」その問いにこの詩は、七歳の子に学ぶ意味を理解させることは難しい、学ぶからこそ学ぶ意味、夢や理想が見えてくるのであり、何かを求めて学ぶことだけが教育ではないと教えています。私はこれこそ義務教育の根本ではないかと思います。確かに勉強しなくても生きてはいけるでしょう。しかし学ばなければ理想は見えてこない。学ばなければ自身の可能性も見えては来ないのです。巽先生の「子ども達にはしっかり学ばせ一人一人に理想を描かせたい」そんな思いが伝わってきます。

そして、その理想はまさにこの第四小学校の地域の人々の強い思いであったことと思います。明治6年農業・養蚕が中心であったろうこの地で、子どもとはいえ、何より人手が欲しい時に未来を見つめ、理想を求めて学問を付けさせることに普請した祖先の皆様の教育に対する情熱は並々ならぬものであったことを忘れてはなりません。

保護者、地域の皆様におかれましてはどうか先人の志を受け継ぎ、さらに強いものにしていただきますよう心よりお願い申し上げます。

私も、140周年という歴史と伝統を受け継いで、さらに次代に伝えていかなければなりません。その重さに縛られることなく、育つ若あゆとしてさらに成長し続ける第四小学校としていくことをお誓いしたいと思います。

(日野第四小学校 中澤 正人)

⑤ 潤徳小学校の歴史と未来を託された子供

潤徳小学校は、平成25年5月12日に開校140周年を迎えました。潤徳小学校が誕生するまでの沿革をなぞることは、明治維新直後の明治6年まで遡ることでもあります。明治維新前の江戸時代には人々が学ぶ場として、藩校や寺子屋、私塾などがありました。明治4年の廃藩置県以降、明治5年には福沢諭吉の「学問のすすめ」が出され、同年8月には「学制」及び「学事奨励に関する仰せ出され書」が公布されました。

学制では、学校の建設、維持費、教員の給料などは、すべて町村民の負担でありました。そのために、町や村が新築の学校を建設するには莫大な資金を必要としました。そのような中、学制発布の翌年明治6年に、高幡・三沢・程久保・落川・百草の5村は、共同で三沢の医王寺に「潤徳学舎」を開校させました。これが潤徳小学校140年の歴史の始まりです。それ以来、本校は、明治・大正・昭和・平成の時代の幾多の社会的変遷にもかかわらず、「潤徳」の校名を変えることなく、この地域の学び舎として存続してきました。その「潤徳」の二文字に込められた哲学的理念を現出すべく、教育目標を「敬愛・自由・勤労」として掲げ、長きにわたる本校の教育実践により、純朴で明るく勤勉な子供が育つ校風が築かれています。なお、新教育制度が定められた昭和22年から昨年度までの65年間における本校の卒業生は、7132名を数えています。

本校は、昭和33年に、三沢から現在地の高幡に移転してきました。ここは、浅川や向島用水、高幡山金剛寺などの自然や歴史に恵まれており、しかも、駅や商店街の近くでもあるにもかかわらず、とても静かで、落ち着いた環境であることなど、学校の立地条件にもたいそう恵まれています。移転以来、現在までに、校舎の鉄筋化や耐震工事、ICT機器の導入、エアコンの全教室設置など、教育施設・設備等の改善が図られました。また、日野市は現在、特別支援教育やICT活用教育など、全国的にも最先端をいく教育を推進しており、本校も特別支援教育に関して、年間を通して全国から多くの視察者を受け入れています。

昭和43年には、PTAの手で「ほほえみの丘」が造られ、子供にとっても人気のある遊び場になっています。私もこの丘に上り、校庭で元気に走り回る子供たちを眺めるのが好きです。さらに、平成12年に学校ビオトープ優秀賞に輝いた「トンボ池」は、向島用水の清流を利用しており、川魚やトンボ・カワニナなど、多種多様な水生動物が生息しており、これらは子供たちのよき遊び相手になっています。時々、青く輝くカワセミを見かけることがあります。このように、自然に恵まれ、心の落ち着く環境の中で、子供たちは、毎日楽しく元気に学んでいます。

日々、地域の皆様の温かな愛情や地域のもつ教育的価値を全身で受け止めている本校の子供たちは、これからの潤徳小学校、これからの日野、これからの日本の、「50年100年先の未来を見通した社会」を創造するにふさわしい人間に育ちゆくと確信しています。私は、今後も地域の人・自然・歴史などの教育力を生かしながら、本校のよき伝統を受け継ぎつつ新たな挑戦を重ねて、未来を託された子供が「これからの社会で心豊かに、たくましく生きる力」を身に付ける潤徳小学校の永遠の存続と発展を祈っています。

(潤徳小学校 竹山 弘志)

参考文献 「高幡風土記」 森久保憲治著

平成22年

「潤徳百年史」潤徳小百年史編集委員会 昭和48年

Ⅲ 研究のまとめ ～成果と課題～

研究主題「郷土意識を育む指導の在り方～郷土の歴史、自然、文化、産業、人の教材化を通して～」のもと、1年間、研究と実践に努めてきた。大きな成果は、郷土資料の教材化を通して、指導者である教師が、郷土「日野」の特色やよさを知り、この教材で授業がしたい、子供たちに郷土の特色やよさを伝えたいと意識を高めたことである。教師の意識の高まりと授業実践意欲が、郷土に対する誇りと愛着をもった「ひのっ子」の育成につながると考える。

教育センターでは、2月に研究発表会、5月と2月に運営審議会がある。運営審議委員の教育委員会・園長会・校長会の各先生方から、「貴重な郷土教材を多数発掘していただき感謝」「具体的な実践例を見て、日野のよさがよく分かった」「日本の教師や授業のレベルの高さを感じた」「ふるさとの大切さを改めて感じた」「授業に学ぶ喜びと出会いの感動があった」「教師の授業力がついてきた」「成果の活用・推進、普及・啓発が大切」「日野市に郷土教育が定着してきたのではないかと高い評価と課題をいただいた。まさに教育センターが「教育の町 日野」の「基本と先進の教育」を担っていると痛感する。教育センター研究発表会の講評、運営審議会での協議、郷土教育推進研究委員会での討議をまとめてみると、郷土教育のキーワードは、まさに「身近」「具体」「地道」「継続」となる。過去9年間の成果は、身近で具体的な教材を発掘し、地道に授業実践を継続してきたことである。郷土を生かす授業は、子供にとってよく分かる楽しい授業であり、教師にとってやりがいのある授業の創造につながっている。

また、本市校長会が郷土教育の重要性を理解し、「郷土教育は校長のリーダーシップから」を合言葉に、積極的に郷土教材を発掘し児童朝会等の校長講話で取り上げている。

私たちの使命は、この成果を本市の幼稚園、小・中学校へ普及・啓発させ、ふるさと日野へ誇りと愛着をもった「ひのっ子」を育成することである。今年度はこの普及・啓発を大きな目標として、3つの重点課題を設定し、教材開発・授業実践に励んできた。

1 成果

(1) 郷土教材の開発と指導者の育成

- ① 新しい指導資料を発掘し、継続した教材の作成に努めることができた。
 - ・日野宿、日野煉瓦、向島用水、豊田用水の教材化を図った。
- ② 幼稚園で紙芝居教材「日野の昔話」を作成することができた。
 - ・高幡不動金剛寺に伝わる昔話「はだかりゅう」「はたかけのまつ」を紙芝居教材とし活用することができた。
- ③ 道徳地域教材「豊かな自然 カワセミ（日野市の鳥）」を作成することができた。
 - ・自作読み物教材の作成と活用ができた。
- ④ 以上の実践事例を郷土教育研修会（7月）・研究発表会（2月）で紹介することができた。
- ⑤ 郷土教育推進研究委員が授業力を向上させ、学校・職場でリーダーシップを発揮し、郷土教育の普及・啓発に努めた。

(2) 郷土資料館・図書館等関係機関と連携した学習指導法の研究

- ① 問題把握・追究・まとめの学習過程で、効果的に郷土資料を活用し、問題解決型の授業を推進することができた。

- ② 新選組のふるさと歴史館・郷土資料館・中央図書館の専門的な見地からの指導・助言のもと、協働授業を実践することができた。
 - ・社会科見学での十分な打ち合わせと体験学習の導入を図った
 - ・郷土資料館による実物の郷土教材を活用した出前授業の充実を図った。
 - ・図書館保有資料（図書、広報、写真）を活用した授業を実践することができた。
- ③ 関係機関、地域人材と連携した授業、フィールドワークの工夫ができた。
- ④ 幼稚園における関係機関・地域人材と連携した園外保育の工夫ができた。

（３） 郷土教材の電子データ化

- ① 「郷土日野」指導事例集と指導事例集の写真図版を日野市立教育センターのホームページに掲載することができた。ホームページ開設以来、アクセス数が１万件を越えた。
- ② 郷土教育に電子データ化された教材や ICT 機器を活用した授業実践を行うことができた。
- ③ 過去のプレゼンテーションデータを全委員が共有し、活用することができた。

（４） その他

- ① 本市小学校校長会の理解と協力のもと「郷土教育は校長のリーダーシップから」を合言葉に児童朝会で郷土教育に関する「校長講話」を多数の学校で実施することができた。
- ② 郷土教育推進研究委員会委員が、１年間の継続研究を通して、日野のよさ・特色に気づき、郷土の教材化・授業実践の楽しさを体験した。また、子供、保護者、地域と共に授業を創造し、授業力を向上させた。
- ③ 本委員会に学校現場から、フィールドワーク、授業、若手教員指導の要請が増え、できる限り学校現場の期待に応えている。

２ 課題

- (1) 研究推進・授業実践の成果をさらに継承・発展・定着させることである。そのため、幼稚園長会、小中学校校長会の理解と協力を得て、幼稚園、小中学校での普及・啓発活動をさらに推進する必要がある。
- (2) 郷土教育推進リーダーの養成と急増する若手教員への研修が必要である。教育現場では、郷土日野への理解が深まり実践意欲が高まりつつあるが、教員・学校間の郷土教育への関心度の差が大きい。「日野をふるさと思ひ、日野に誇りと愛着をもった教員」「ひのっ子教育を背負って立つ気概をもった教員」の育成が必要である。
- (3) 日野市教育委員会と連携し、日野の特色やよさが理解できるフィールドワーク・教材化・授業づくりを工夫した研修会を充実させることが必要である。
- (4) 博物館、図書館、公民館等生涯学習関係機関との連携・協力関係を深め、学校との人材の交流、協働授業等の協働関係をさらに広め深めたい。
- (5) 本委員会所属委員間で相互に授業を見合い、児童・生徒の実態、郷土教材の有効性を検証し、よりよい教材化と授業実践を図りたい。

(小杉 博司)

郷土教育推進研究協力者（敬称 略）

・土 淵 眞佐子	八坂神社宮司	講師
・杉 浦 靖 俊	大昌寺住職	講師
・佐 藤 福 子	日野宿名主佐藤彦五郎子孫	講師
・井 上 雅 雄	新選組六番隊長井上源三郎子孫	講師
・石 嶋 日出男	日野図書館	講師、資料・情報提供
・松 本 保	農業指導者	講師
・伊 藤 稔	農業指導者	米作り授業協力者
・大 貫 良 江	農業指導者	稲の活用授業協力者
・上 野 さだ子	郷土史研究家	資料・情報提供
・北 村 澄 江	郷土資料館	資料・情報提供
・矢 口 祥有里	郷土資料館	資料・情報提供
・柳 元 太 郎	教育センター	原稿寄稿
・千 葉 正	教育センター	I C T活用
・垣 内 成 剛	教育センター	ホームページ情報発信

郷土教育推進研究協力団体

・日野市立日野第一小学校 ・日野市公立小学校校長会 ・高幡山金剛寺

平成 25 年度 郷土教育推進研究委員会委員

No.	役 職	所 属	職	氏 名
1	委員長	日野第一小学校	校 長	中 島 和 夫
2	副委員長	日野第二小学校	副校長	秋 田 克 己
3	委 員	元渋谷区立常磐松小学校	元校長・学識経験者	會 田 満
4	委 員	元日野市立百草台小学校	元校長・学識経験者	吉 野 美智子
5	委 員	日野第三幼稚園	教 諭	富 尾 真須子
6	委 員	日野第四幼稚園	教 諭	石 川 星 子
7	委 員	日野第一小学校	教 諭	馬 鳥 誠
8	委 員	日野第二小学校	主任教諭	松 本 美代子
9	委 員	潤徳小学校	教 諭	入 野 祐 子
10	委 員	日野第八小学校	主任教諭	重 末 祐 介
11	委 員	七生緑小学校	非常勤教員	小 坂 克 信
12	委 員	新選組のふるさと歴史館	副主幹・学芸員	金 野 啓 史
13	委 員	郷土資料館	学芸員	中 山 弘 樹
14	委 員	中央図書館	司 書	星 ま ゆ み
15	事務局	市教委学校課	指導主事	加 藤 ユ カ
16	事務局	日野市立教育センター	所 員	小 杉 博 司

郷土教育推進研究報告書

平成 25 年度「郷土日野」指導事例 第 9 集

発行日 平成 26 年 3 月 31 日

発 行 日野市立教育センター
郷土教育推進研究委員会

〒191-0042 日野市程久保 550

TEL 042-592-0505

FAX 042-592-1148

印 刷 システム印刷株式会社